

起誓文

泉鏡花作

お客分きやくぶん

松蟲まつむし

銀色赫奕ぎんしよくかくえき

納涼臺すゝみだい

二二十六夜にじふろくちや

住居之段すまひのだん

朝戸出あさとで

田舎唄いなかうた

蟹の怪かにあやしみ

岩井静馬いはゐしじま

若木の橘わかきたちばな

火焰山くわえんさん

神童しんどう

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

お客分きやくぶん

—

「おや、お歸りでございますか。」

ステーションまえの
停車場前の新開地、古顔の犬も居らず、蝙蝠の棲
む穴も出来ない、未だ新しい軒並び、海水浴旅館の
案内所。鮑の粕漬、水雲の賣店、一寸一杯お晝食、
お休み處などある中に、客が駕籠で来た時分から、
一軒老舗の角の茶屋。

こゝに名物の女夫饅頭と云ふのを商ふ。釜の上に
冷えたらしい蒸籠を重ねた店の、油煙で燻つた眞赤
な灯、薄暗い釣洋燈の蔭から、三十近だが片付かぬ、
お縫といつて評判なのが、店さきへ通りかゝつた男
女連を見懸けて呼ぶと、

「あい、唯今。」

と婦人が先へ、あと齒の下駄の音からりとさせ、
素足の爪尖ちら／＼と、摺れ逢ふばかり内端な歩み、
片棲きり／＼と引上げた、裳を溢るゝ水色縮緬、露に
しつとりと重たさう。

鼠地に紺で市松形に、三番と置いた組合の揃の浴衣に、黒縹子の帯を引かけ結び、小造だけれど襟脚の長い脊は高いくらゐ、洗ひ髪をさらりと無造作に亂したが、上手に肩で捌いたれば、丈に餘るのも目に立たず。眉細長く、鼻筋の通つた、目の涼しい、細面、口許が引緊つて、頬の肉の薄いのは、愛嬌に缺けたが品の可い處あり、年紀の頃二十か一。

眞白な胸を衣紋寛やかに、桁を短う、ふツくりした腕あらはに、竹の柄を軽く取つて、提灯を提げた、帯にも棲にも蹴出しにも、媚かしい夜の隈、浴衣の袖のひだが揺れて、店頭へ來て、嬌態好くイむ。

お縫は蒸籠の後へツイと立ち、干菓子箱の硝子蓋、龜裂を稻妻形に貼つた上へ、軽く手を置いて半身を乗出いて、

「まあ、お掛けなさいまし、御緩りでございますしたこと。」 婦人は忘れたやうに其の提灯を地摺にぶらり、眞直に手を下し、まともを受けた洋燈の灯が眩しいといつた目を、一ツばつちりと瞬いた。

「あゝ、難有う、大分手間が取れたでせう。」

「しばらくでございましたよ。先刻お寄りなさい

ましたのは、未だ灯の點くか點かない時分でござい
ましたもの、ねえ、母様。」

背後を見返ると、停車場に面した向うの隅の大火
鉢に肱を支いて、前に腰を掛けた車夫、魚屋なぞ草
鞋連の相手をしながら、言を途切らして、海手の方
の軒に立つた、此の婀娜者に見惚れて居たのが、
「然うとも、お前。」と仔細のないことを仰山
に答へたが、心付いて車夫に向ひ。

「だとね、うむ、然うかい。」と可い加減なこ
とを云つて、煙管を見ると吸殻が消えて居るので、
一ツ扱いて、トーンと叩く。

寂漠する。

婀娜なのは立つたまゝ、白脛を外に捻ぢて、下駄
を溝石にカラリと當てた。

「姐さん、最う何時です。」

「未だ下りの終汽車が着きません、まあ、お休み
なさいましな。」

「然うね。」いひながら、打傾くが如くにして、

「あなた。」と振向く。

背中合せに間を置いて、人通のない路中に、秋草

山の空を仰いで、星の美しいのを視て居た、つれ
の少いのが、「一寸、お掛けな、」

紺^{こん}緋^{がすり}の單^{ひとへ}物^{もの}、鼠^{ねずみ}縮^{ちりめん}緬^のの兵^{へこ}兒^{おび}帶^びして、此^{これ}は草^{ざう}履^り穿^{ばき}。

麥^{むぎ}藁^{わら}の海^{かい}浴^{よく}帽^{ぼう}を、眞^ま白^{つしろ}な紐^{ひも}で結^{むす}んで大^{おほ}きやかに肩^{かた}にかけた、年^{とし}紀^じは同^{をんなじ}一^くらゐ歟^か、人^{ひと}摺^すれのしなない内^{うち}端^わらしい質^{たち}であるから、或^{あるひ}は五^ごか六^{ろく}かも知^しれぬ。

休^{やす}んで行^ゆかうといつたので、提^{ちやう}灯^{ちん}を下^{した}に置^おき、直^{すぐ}に傍^{かたはら}なる内^{うち}の者^{もの}の納^{すゝ}涼^み臺^{たい}兼^{けん}帶^{たい}の床^{しやう}几^ぎの上^{うへ}に、襖^{つま}も下^{おろ}さず、

「あゝ。」と、片^{かた}手^てを背^{うしろ}後^ごへ反^{そら}して、可^か愛^{はい}い足^{あし}を素^ま直^{すく}に、下^げ駄^たの齒^はの見^みゆるまで、罪^{つみ}もなく投^なげ出^だして、草^{くさ}臥^たれたあどけない風^{ふう}、ほつれ毛^げを一^{ちよつ}寸^と拂^はふ。

娘^{むすめ}は干^{ひく}菓^{わし}子^のの箱^{はこ}に頼^{たよ}杖^{じょう}して、一^{きよ}擧^ど動^{どう}に目^めを注^そぎ、惚^ほ々^くとする顔^{かほ}色^{しき}、蔭^{かげ}では熱^{ねつ}心^{しん}に其^その假^か色^{いろ}を使^{つか}ふと知^しるべし」

「あなた、これから月^{つき}ヶ岡^{をか}まで、随^ず分^{ぶん}お大^{たい}抵^{てい}ぢやございませぬ。」

「否^いえ、つれがありますから。」と、何^{なん}の氣^きもつかずに云^いつた。

「まあ、お樂^{たの}み！」

と目を圓くする、お縫の呆れた顔の前へ、ブイと出たのは連の男で、背にかついだ麥稟帽か洋燈のあかりを遮る蔭に、婦人は耳許をほんのりと、口に差し寄せて提灯を一吹、フツ、目を反して、星を見て、澄したものである。

青年は頓着せず、

「姐さん、此の梨はおいしいだらうか。」

「唯、否、其よりか其方の筈のが、好うございませよ。」

「どれ、此かね。」

「其は若旦那様、泡雪と申しまして、口へ入れると皆解けて終ひます、飛んだおいしいのでございませよ。」

「いや、何うですか、姐さんの口の方が餘程旨しさうでございますね。」

「あら、あんなお人の悪い、御新姐様お聞きなさいまし。」

打微笑むのみ、

「……何にも不言。」

「これ、お客なんだよ。」

「若旦那。」

「何だ。」

「月ヶ岡の若旦那、お客分といふのでござんせ

う。」「と母親が又向うから伸上つて煙管を杖。

「ひろめをしたら祝つておくれよ。」

「そりや、もう。」

「一ツ御馳走にならうかね。」と、取つて床几

に憩つたが、婦人とは斜向の背中合せで、恰も懇意

な獨りもの同士、壁隣に住つたといふ趣である。

「梨を食るんですか。」

「あゝ。」

「庖丁を貸して下さいな。」

少し調子高にいつて、投げて居た足を引いて、床

几から立たうとする。

「其處に在らつしやいませよ、唯今上げます。」

「何うぞ。」

「それから、煙草の火を。」

「光や、お茶をお茶を上げなさい。さあ、睡つてちや、

不可いぢやないか。」

「はあ。」と云ふと、ずるりと土間へ、はだけた

膝ひざをつきさうにしたが、危あやうく貽のこして身からだを橋はしに、睡ねむが
りの雇女やとひをんな、ばた／＼と希代きだいに泳およぐ。

「おツと、どツこい。」

「呀や！ 相あひかはらず。」

「お天てん氣きが變かはるのかい。」 と草鞋連わらぢれんが哄どうと笑わらふ。

洗ひ髪あらがみの意氣いきなのは、胸むねを伏ふせて、俯向うつむきながら、
手尖てさきの働はたらきに器用きようを見みせた、皮かはは溝みぞの上うへに長ながく垂たれて、
梨なしは半なかば掌てのひらに雪ゆきを捧さぐげたやうである。

切れものゝ刃はを見詰みめながら、

「おいしさうですなえ。」

「そりや貴方あなた、其それに何なんでございます、つい晩方馬ばんがたうま
に附つけて持もつて参まりましたばかりですもの。」

「あの、先刻さつきゆ行きがけに此處こゝに繫つないであつた馬うまは、
これを積つんで來きたんですか。」

「然さやうでございます。」

「然さう、大おほきな顔かほだわねえ。」 と呶つぶやいて眞面まじめ目

で居ゐる。

黙だまつて煙草たばこを飲のんだのが、

「大おほきな馬うま？」

と聞きとが、妙めうなことをいふと思おもつたらしい。

娘むすめは堪たまらず笑わらひ出だして、

「東京とうきやうの馬うまは小ちひさいんでございますか。」

「何をだらしのないことを言ふんです。」

庖丁の手を留め、眉にはら／＼と亂るゝ髪を、横に軽く拂ひながら、

「嫌ぢやないんですが、恐らしいから、馬車でも、荷車の中でも、成たけ遠くへ退いて歩行くんですから、あんなに近い處で見たのは珍しい位なの。」

「だつて、お内へ行らつしやいます路では、澤山、馬士が曳いて行くのにお逢ひなさんでございませう。」

「其の時は、連の方の背後にかくれて、目を瞑るの。」と目を瞑る。

「へい、なるほど。」と是非に不及感じ入つた體でお縫は頷く。

「先刻のは其處の柱に、緊乎と、結へてあつたらよく見ました。而して顔の長いツたら、こんな。」

と庖丁を持つたまゝ、腕を白う、自分の顔の前へ衝と伸した。

「それぢやまるで、狐のやうだ。」
「人！ 憚様ですよ。」

二人が交へた咄嗟の此の言、お縫には聞取れなか

つた。はて、間は抜けたとは思つたが、轡頭を引繞らし、話を棒鼻から取つて返して、

「然う／＼、あの時、お通りなすつたんでございますね、眞實に何をして在らつしやいました。」

「些と、お轉婆をして居たんです。」といひかけて、フト梨を剥く手を留め、掌をかへして、兩方を瞳を動かし熟と見たが、

「おや。」庖丁を置くや否や、まさに剥き終らうとしたのをばツたり取落した、小さな雪丸げは、露を持った夜の地へ星の宿りさうにころりと轉がる。

お縫が驚いて、

「何うなさいました。あれ！」

「まあ、私。」と細い指を宙にばら／＼と雫を拂つて、うつかりした其の風情。顧みて、

「何うした？」

「お切りなさりはしませんか。」

「否。」といつて手を袂へ、白の絹ハンケチを取出して、掌を合せて拭き／＼、

「はじめツから綺麗にして、それから取れば可かつたのに、今お轉婆で思ひ出したら、手が汚れて居

たんですわ。ねえ、
松蟲まつむしを捕つかまへようツて騒さわいだで
せう。」

四

「何て處、此のさきの、海へ出ようとすする些と手
 前の砂ツ原に蒼白い異人館がありませう、橋があつ
 て、片一方が芋畠になつてますね。路傍に三味線草
 だの何か、入ると乳ぎり伸びて居るでせう、彼處に
 澤山鳴いて居るの、松蟲ツたら、まるで草續きに一
 軒々々、世帯を持つて棲つて居るやうですわ。しば
 らく立つて聞いて居ると、欲しくなつて仕様がな
 いんです、ですけれどもねえ、灯もなし、お星様は出
 て居ても宵暗でせう、何うすることも出来なくツて、
 私口惜くツて、堪らなかつた處へ、向う横町の八百
 屋さん、異人館へ急に納めるものがあつて、其の
 歸りがけなんだつて。
 提灯を持つて居て、蟲を取るんなら貸ませう、
 然ういつてくれたもんですから、それから方々草
 中を暴れたんでせう、草は探しさ、お前さん、あか
 りが茫乎して、じれツたいから、蠟燭を引張り出し
 て、裸火を振つて潛つて歩行きました。

「其ですもの。」と唇に指を觸れて、眉を顰め、
 「私、つい氣が付かなかつたの、ぢかに此の手ぢ

や上げられやしないんです、姐さん、憚り様、一ツかはりを剥いて上げて下さいな。はい、庖丁、

振仰いで差出したのを、若年は無言のまゝ、菓子箱の彼方へ取次がうとする時、梨を引摺むと、お縫は肥つた身を小取廻、急いで下駄を引かけて、

「其處へ参ります、参ります、可うございます。」

何も其の位なら汚らつしやりやしませんわ。」

「何うして亂暴なんですから。」

「だつて、あなた、草中は夜露がひどいばかり

ぢやありませんか。」

「其でも汚いんですよ、馬の草鞋が打棄つてあつたし、女のね、駒下駄の緒の切れたのが片足さ、草ツたら蒼い水晶のやうで、露が透通る中に、チロリンノ、何うも葉さが揺れるやうに鳴いてるから、夢中になつて櫛を落つことしたのも知らないで探したんですが、晝間見たら、それこそ汚らしくツて大變だらうと思ふの、ねえ。」と薄ら寒さうに肩を窄め、両手でしツかりと乳を抱く、雪の頸を軽く撫でて、そよ／＼と風が出た。

溝石の外に棄てられた一塊の雪は砂にも塗れず、
早や初秋の氣の所爲か、それさへ佛に立つ位、五六
軒筋向うの、町家に交つた茅屋の軒に、淡く残つて
居た蚊遣の煙が名残なく消えると、髪に染み、袖に
宿つた磯の香が、ほの／＼としたのがはじまり。

界限の灯が一ツ消え、二ツ消え、やがて間近な腰
障子に人の影法師が大きく映つて、屋根暗く、銀河
つら／＼と低く下りた。

一點の雲もなく、星は一ツ一ツあらん限りの光を
放つて、ものゝ凝つたやうに輝く間、空の色は漆の
如き、其の影を敷いた初夜過ぎの町に、折から、犬
も鳴かず、ぱつたり人の往來途絶えて、石ころも無
い路傍に、唯一つまみの黒き砂あり。其の砂、見る
／＼うちに堅まつて、石となり、翻然と動いて木
の葉に變じ、忽ち足が生え、爪が出来、むく／＼と
躍り出でて、暗い隅から灯の射す中へ、さら／＼と
来て、體を据ゑ、斜に構へたるは、先づ・・・

何物ぞ。

五

すなはちこれりやうがんでんにあり
 即是兩眼在天、一甲不着地、大足二足、小足八足、
 右行左行而渡世者、蟹也。

甲を斜に溝石へ反を打つて、蹴出の媚かしくこぼれた端を、引挟まむばかり間近く、今しも男の手から煙管を受けて、伏目に一吸した地を這ふ煙を貫き、ガツキと爪を上げたのを、見るとも無しに一目見るや。

「あゝ、」と呼吸を引いてついと立ち、身を翻して慌しく、青年と傍に立つた娘の中を、羽色の育い、あはれな鳥の、けたましく搔潜つて、突然土間へ飛込むと、烈しく下駄の齒を踏鳴らして、
 「厭よ！ 厭よ！」と身を揉んで、煙管をかざして袖を上げた。

恰も其の時、洋燈にも蛾の大きなのが、ばツさりと、白い粉を撒いたので、停車場の灯は届かず、驛長室の窓の明、薄黄色に見えるばかり。此が消えたら、界限に灯は無くならう。一國を暗にする蟲の羽

音の凄じさに、飲むものは飲み、饒舌るは饒舌り、
草臥れたのは草臥れて、壁を天窓で小突いて一人、
敷居にはらんばひになつて一人、**ニニ**といふ身で頭
を膝に挟んで最う一人、母親は火鉢の縁に頬杖して
血の道の廣告に出ようといふ顔、猫及び雇女は蚊の
鳴く中に座睡して、陰々滅々、穴居時代の風情であ
つたが、婦人の叫聲に齊しく驚き、**や**々といふ、一
時に魂が、ひよいと入ると、思ひ／＼の立働きの起
返るやら、突立つやら、膝を立てる、猫が歩行く。
停車場ではがら／＼と鈴が鳴つた。

「何です。」

「何うなすつた。」

と逸疾く、納涼臺に立ちかゝつたのは、大肌脱の
車夫と、向顛卷の魚屋さん。

時に海手から腕車が二臺、停車場をさして、矢の
如く駈け抜ける、響きに應じて、怪物の足が消えた。
木の葉となり、石となり、見る間に黒き砂に紛れ
て、横ざまに見えなくなる。

娘は前後をニしながら、

「何でございますね、梨の白いのが落つこちたも

んですから、蟹が握飯だとも思つたんでせう、そんなにお嫌ひでございますか。「何ね、恐しくはないんですけれど、吃驚したんですもの。」と極が悪さうに莞爾する。

「悪戯が過ぎるからです。」

「だツて……」とうつむいて口の裡、仔細ありげに言ひかはしたが、驚被鎌倉に駈け着けた、御馬前の兩名聊かも耳に留めず。

「はゝゝゝ、蟹ですかい。」

「私あ、また可い心持にうと／＼しながら、荷の中なかの鰹かつをが泳かつをおよぎ出だした……と。」

魚屋の彦次は、若くつて、威勢の可い、毛だらけな、腋の下の汗を拭いて、

「現と云とふんだらうか、それとも幻か、私ア何も眠つたとも思はねえけれど、ふらりと往來へ泳ぎ出すから大變だと思つた處だつたから、尚のこと驚きたい、えゝ、姐え。」

「笑ふ。」

「まあ、氣の毒だつたわねえ。」

車夫の筑松より、

「何もお嬢様、氣の毒がんなさることはねえんでさ。何、鯉が泳ぐ夢なんか見るもんですか、今ね、口を開いて寝て居やあがつたから、鳶に攫はれた處を見たですよ。」

「馬鹿をいへ、へむ、彦次の魚は生きてるぜ、影がさしや鳶を取らあな。」と大力味で肱を張り、足を踏んで、灸のあとがある背中じゃがみ、天秤は草鞋の下つた柱に立てかけ、此のあたりに使ふ魚

籠を二ツ宛かさねたのを一荷、土間に引入れてあつた、蓋を向うへ撥ねると、銀色赫奕として鯉あり。

彦次は魚頭に片手を翳し、

「これだもの、夢に泳ぎ出さあ、そら未だ、くり

／＼と目が動く。」

「嘘をつくぜ。」

洗髪のは肩越に差覗いて、

「サウダですか。」

「へい、さうだ鯉のいかいんです。」

「活がいゝねえ。」といふ口ぶり、引かけの帯、裾端折、浴衣の染も質素なので、馬の顔が長いといつた人に似ず、花道を出た世話女房といふ風がある。一ツは氣の毒らしい今の騒ぎのまじくなひに、鯉の活を賞められて、彦次は大得意。

但し背に近い美人の胸に、力瘤のでこぼこした肌脱の身を、もぢ／＼、

「何うだ、御新姐様の目が曇らぬ鏡よ。」

「云つてらあ、私だつて、お客を乗せりや、鳶くらゐにや一のしに飛ぶ男だ。」

「此の鳶野郎、鯉を攫はれちや大變だい。」

「呵々と笑つたが、

「物騒々々。」と呟いて、彦次はやがて蓋をしよ

うとした。

「あなた。」

「・・・・・・」

「一寸買つて行きませうか。此間から鱈ツか持つて来ないんだもの。」床几に掛けたのが、又星を見たまゝ、振向きもしないで頷く。

「魚屋さん、幾干なの。」

「そりやこそお聲がゝりに、彦次はしかゝつて居た蓋を、今度は威勢よくボンと撥ね上げ、

「え、安うがす、安くして置きますぜ。御覽なさる通り唯もう一尾ですからね、先刻の地引で上つたのを、此處へ持つて来るまでに、其處らのお別荘へ羽が生えて飛んだですが。魚はもう此の通りだ。」

「お前さん效能書は分りましたよ。」

彦次は目を返して、

「黙つて居ねえ、おゝ、お前、其の梨は何うだ。」

「諏訪法相の兜といふ形で捧げ奉て居るぢやねえか。」

と近ちかごろ玉たま之の丞じようといふやくしや俳優が、明神みやうじんの境内けいだいで小屋こやがけ芝居しばゐをした、其その十種香しゆかうの段だんで、見覺みおぼえの警句けいぐを吐はく。

「おや、おや／＼。」とばかりお縫ぬひさん大テレで、手てに据すゑたのを廻まはしながら庖丁ほうちやうを取りとにかゝる。
「澤山たくさん、其そのまゝ持つて歸かへるから可いい。もう二つばかりおくれ、次手ついでに袂たもと入れて行く。」銀煙管ぎんぎせるを、御殿持ごてんもちの筒つゝへさして、膝ひざについて居ゐたのを持直もちなおして、其手そのてを袖口そでぐちに入いれたまゝ、床几しやうぎを放はなれて衝つと立たつた、袂たもとは帯おびに、びたりとつく、瘡形やせがたな人ひとに一そよぎ、星ほしきら／＼と風涼かぜすゞし、月つきヶ岡をかさして歸かへり／＼又度またく。

納涼臺

七

「彦、やい、恚う唯は返さねえぜ。鯉を一本可い
値で商ひをした上に、御祝儀を二貫とせしめて、別
嬪を歸しやがった。畜生め。」と車夫は納涼臺に
居所をかへた。

「何さ、ありや二十五銭なら大した高い値ぢやあ
ないがね。」母親も店の方へ出かけて来て、
「しかし、兄哥や。お一前一寸々々商ひに行くだ
らう、内も恚うやつて、海へ行らつしやる行歸りに
御鼻屑になることなり、彼の方達は何にも御存じな
い、お坊ちゃんとお嬢さま、阿漕なことをして儲け
ちや濟まないよ。」

彦次は田舎の氣樂さ、溝石の上に立ち、肌脱の身
を露出で、

「おツかあ、い心配しなさんな、そりや無え、憚
りながら彦次だ、いや又儲けようとした處で、今の
一件だ、何うしてうつかりして居ようものなら、飛

んだ背負投げを啖つて酷い目に逢ふ。」

「今の一件ツて何なの、御祝儀の出た一件、彦さん、お前が、何かいつてへへへへへへツて希代な顔をおしだと、おや、然うお前さんだツたのかい。御免なさいよツて、恚う縺子の帯の間へ手が入ると、銀貨が一ツ、アイヨさ。そして何うも極りの悪いやうな彼の笑顔ツたら、何うも／＼無いんだよ。」
と自分が大きに笑顔になつて、お縫は半面を團扇でかくす。

「さあ、大變、何うも早や、此間ツから様子が變だ、何かといふと、妙に別嬪の假色を使つたり、身振をしなさるがね、いけやせん、肥つてるもの。何それも肥つたのと瘡せたのだから、大した相違はねえやうなもんだけれど、唯、何だね、女の名を濁つて讚むだけさ、一寸先づ、前方の風が玄治店のお富だと、お前さんは、」

「何だい。」

「然うさ田舎茶屋のおとみさ。」

「畜生！」

「だがね、唯た今アイヨと帯の間へ手をお入れな
すつた風は、そつくりでしたぜ、何なら銀貨を一ツ
お驕んなさい。然うすりや、尚の事お富さんだ。」

「可い加減におしよ。」

「おツと打たねえで、何うぞ其の團扇を貸してお
くんない。身に染みるやうだが、何うも蚊が居て
不可え。」

彦次も毛脛を高く摺り合せ、

「ほんたうに酷い蚊だ、よく彼の方達はじつとし
て、身悶もしないで居なすつた。」

「其筈さ、お前連のやうに酒をのんで裸ぢやあな
いものを。」 といひながら、母親も土間へ下りた。

納涼臺は夏中いつも此の時分から、内の者が領す
るのである。

「筑松。」

と呼んだ娘の語氣が極めて烈しい、母親といふ味
方を今身近に引寄せたから、こゝで焼酎の貸を枷に
大に仕返をされることゝ、車夫は思はず恐入ツて、

「へい。」 と弱い音。

「串戯はよして、彼の方は、お富さんといふの。」

「何、そりや出たらめさ。眞實何てゝえんだか、

尤もあの方がはじめて停車場へ着いて、此の店へ休んで、それから月ヶ岡まで行らつしやらうといふ時、おともをしたのは私でさ。そら、姐さんも知つてませう、先月の未だ、ねえ、阿母。」

「然いつさ、晩方だツけ。」

「小形の革靴が一ツ、ハンケチに薬瓶を包んだのを用つて、其の手で涼傘をさして、恚うだによつて、」

娘は團扇を頬にあてたが、

「質素な鼠の縞清明石の單衣を、あの素裸に着て、みぶ水浅葱に白で撫子を抜いた紹と、茶の無地の紹とを打合せた帯を、しんの無いお太鼓に薄く結んで、下じめが鶯茶に海松ふさを抜いた縮緬さ、一寸、よく知ツて居るだらう。」

「何うも其の可かつたこと。そして上品に白足袋を穿いて、其の時は引詰め銀沓返、根を短かうして飾ツ氣がなくツて、矢張水色縮緬の躑出だつたでせう。紅ツ氣ツたらこれツばかりも無いんだもの。停車場からぞろ／＼と出て来る、人ごみの中を抜けて、向うから内へおいでなすつた時は、一寸三十ぐらゐに見えたらうぢやありませんか、ねえ、おツかさん。小造な品の良い高等な年増に見えたねえ。今夜なんざ、草双紙の繪に描いてある、此處らの船頭の姐御といふ風だけれど、何うして其の時は、どんな立派な處の令夫人かと思つた。」

「矢張御縁だよ、つい停車場前に四五軒も新店の茶店が出来て居りますに、まあ、よくおいで下さいましたと云ふと、大勢人が居ますから、此方へお邪魔をしたんですツて、小さな聲で言ひなすつた。呼吸が切れて、どんな長旅をなすつたらうと思ふくらい、旅の疲か、それとも御病氣か、口紅だけは薄くさして在らつしやつた、其の色も白つちやけた面糞

れ、目ぶちなんざ眞蒼で、晝間見てさへ宛然幽靈。

月ヶ岡まで直ぐに俾を世話して下さいとおつしやるから、はてな、此春から歸省つて在らつしやる新家の若旦那、數夫様は好男、久しく東京へ行つていらつしやつたから、こりや仔細あつて生靈でも來たのではあるまいか。影も薄し、第一、活きた身體で唯た一人、此處等まで來られさうもない御容子なり、また、お前、傍で見ても口をお利きなさるのを聞くと、漸々と二十そこいらだりお嬢様、あなたお一人で入らつしやいましたの、まあ眞個に、と呆れたよ。

それから、未だ日は高いが、延明寺からさきの五丁躰で、山の裾が暗くならう、停車場前の帳場に居る若い衆に、間違の無いことは知つて居るが、中でも、白地の手拭の結目が、顔より大い向う顛巻で、親仁のさき曳をして居た時分から氣心の知れて居る、お前を名ざして、呼びに遣つたといふものさ。」

「そりや、阿母、私あ、何のお客様だつて、粗略にや思はねえけれど、いつも不愛想なお前さんが、わざ／＼此處ン處まで出て來て、氣をつけて上げて

くれつて云ふし、向うの鎮守様の森を山の手へ折曲る處で、見ると、未だ立つて見送つて居るだらう、こりや、昔阿母が浮氣をした時分のお主筋か、それともお茶代がうんと出たか、

「まさか。」

「筑どん、内ぢやお茶代でね、人様のお扱を違へるやうなことはしませんよ。」

彦次は唐突に、

「しかし借のあるものは違ひます。此の通り、人が棒立ちに立つて居ても、お掛けなさいともいつちやあくねえ。」

お縫は一寸容子を極まつて、このところ假色で、
「勝手に其處へお掛けなねえ。」

「よう！ 正のもの、難有え。」 と額をぴツしやり。

「旨いだらう。」

「まあ、開きねえ。何でもこりや大切なお方だと思ふから、乗せた私の氣の揉めること一通りぢやねえ。大分病氣のやうだから、急いぢやあ、ぐらついで、身體に障るだらうと思つたし、然うかといつて

西日にしびが酷ひどい。阿母おつかあ、あの日ひは又恐またおそしく暑あつかつたから
ね。よた／＼曳ひきながら、何なにさ、此この入日いりひを背せにし
ちやあ堪たまるまいと、母衣ほろはかけて置おいたけれど、私わたし
あ、ハア／＼してあぶら汗あせが出でた、さつきのやうな
元氣げんきに、よくまあ、おんなすつたと思おもふ。」

母親おふくろは頷うなづいて、

「大抵たいていの方は白しろいのが日ひにやけるが、あの方かたのは
蒼あをざめたのが白しろくなつたよ。矢張やっばり潮風しほかせが利きくんだ
ね。」

「阿母おつかさん、他ほかに利きくものがあるんでさあね。」
と娘むすめは悟さとを開ひらいたやうに言いふのであつた。

二十六夜

九

「いや、見通しだ、姐さん目が高い、私も薬の利
目には驚いた。然も路傍の地藏様の前で、效能立處
にあらはれましたからね。何の事はない、停車場前
の、廣告にや、婦人一切の御薬として、月ヶ岡の若
旦那の肖顔を出したいくらゐなもんだ。

聞きねえ。

それからだ。いふ通りお大事なものを乗せて、よ
た曳きによ曳いてたけれど、餘り我ながら意氣地は
ねえ、延命寺手前の小橋なんざ、些と合せ目がござ
つてゐるから、静に曳くよりか一呼吸に飛び越す方
が無難だらう。

もし、些と急ぎませうか、おからだに障りやしま
せんかつて、聞くとね。何うぞ後生だから急いで下
さい、知らない土地だから遠慮をして居たんですが、
じれつたくつてノ、と、恚うぢやないか。

え、おい、何のこつた、これ、海軍役所の旦那

が自轉車と、駈つこをするなあ、己ばかりといふ私だ。」

「自慢はよしてよ、ふむ、其處で薬は利いたのか。」

「聞きねえ、お縫さん、聞きねえ、阿母も聞きねえよ。」

「こんなに出張つて聞いているぢやないか。あの方たちの話だから、眠がりの私も目をこんなにして居るんだよ。お縫坊は素より夢中なり、御覽な、最うステーションの戸は閉まつたし、近所でも大概灯を曳いて、店を片附けたよ。」

「まツたくだ、いやに寂として風立つて居ら。氣は心で、これでも向うの氷店に、軒提灯の數でも殖しや、未だ夏の盛だに、唯さへ不景氣な處を、恚う又皆滅入つちやあ、土地の衰微だね。お客は何てつて來るんです。避暑だとか、海水浴だとかいふんぢやないか、尤も此處いら。田圃にや月中から赤蜻蛉が飛んでるからね、せめて停車場界限でも赫と陽氣にして居ないと、お客たちは汽車の窓から顔を出し

て、覗く拍子に嚏をします。尤も八月の末にや未だ
がね、何の彼のつてこれで來月の半ばまでは、東京
から入つて來ようといふのに、仕様がねえ、今夜は
また其の中でも、宵から寂しいや。串戯ぢやねえ、
床屋なんざ宵張の癖に、恐しく早寝をした。おや、
いつも納涼臺で寝て居る洋燈屋の兀親仁も、今夜に
限つて出て居ねえ。」

「これ、聞えるよ、お前、今夜はね、二十六夜な
のさ。九ツ時から早起をして、山だの、海だのへお
拜りに行かうといふつもりで、早寝をしたのが大分
あらあね。今年になつてはじめてだ、背戸まで秋が
來たやうだけれど、まだなか／＼此様なこつちやあ
りやしない。」

「お前方知らねえか、今夜二十六夜得でな、月が
岡の八幡様に、村の若い衆が催しの改良劍舞ちうが
はだかるだ。そも／＼熊ヶ谷直實はアだの、杯手に
持イ見渡せばアだの、はあ、種々ある中にも、新田
の勝公と、西畠の源坊が、掛合の曾我兄弟討入とい
ふが、コレ、芝居がゝりだあ。」とのそ／＼と出

て来たのは、框かまちに寝ねそベツて居ゐた、これは月つきヶ岡をかあ
たりの作男さくをとこにて候なほ。大欠伸おほあくびをして身からだ體たをかき、

「先さつ刻き此こ處ゝ等いさ使つかひに來きた次つ手いでに、穴あ市なし（賭と博ばくの名な、
風俗ふうぞくを亂みだすを以もつて細説さいせつは此處こゝに省はぶく）で、些ちとせし
めてこましたで、焼酎せつちゆうをあふると、うと／＼したが、
幸さいだあ、何どの道みち、これ、夜明よあかしだと思おもふで、今いまの中うち
寝ねてこまそと、横よこになつたけれど、主ぬしたちが、別嬪べつびん
の風説うはさするで、現心うつしこころに何なんのことはない、辨天べんてん様が夢ゆめ
枕くらに立たたつしやるやうで、寝ねつかねえでの、ちつ
とんべい、其そわ血ちの道みちの薬くすりちうのを貰もらはうと思おもつて
出でて來きたゞ。さあ、語かたらつしやいまし、私わしも聞きくべ
い。」と、口三昧くちまいあたりに又また御新客ごしんきやくお一人ひとり様さま。

「五丁躰を飛ぶが如しだ。瓦を焼く取着一軒家から、二軒三軒づつ、ちらほら百姓家が見え出して、それから、それ、若い衆、お前達が、月ヶ岡の村へ入らあ。」

「然うだよ／＼。」

「路傍に地藏様があるだらう、路傍つたつて野中の濡佛ぢやないや、一體月ヶ岡邊にや一杯に咲いてるが、螢草がむら／＼と咲いた中に、四本柱に小さな屋根を葺いて据ゑてあるね。」

「はあ、ごさいやするて。」

「其處だよ、效能立處に顯れたといふのは。一二町手前から見えたがね、田舎にや珍しい、容子の可い書生さんが彼處に立つてると思つたつけ。」

其の筈だ、月ヶ岡の若旦那だと、私が目よりさきにお前、俾の上で別嬪、何今阿母のいつた、其ん時は生靈だ、數夫さん！と云つたらうではないか。

蹴込を踏みなすつたわけでもないが、何だか恐しく氣合が入つて、上から押伏せられるやうだ、私あ釘

づけに楫棒を留めたのさね、然うすると書生さんも、つか／＼と寄つて来て、何とも謂へない顔をして、お縫さん其の顔が薬になる、そして、おゝ、お前ツて、其處で名を呼んだんだけど、私は茫乎して居たから、つい聞損なつたんだ。村方の若い衆、お前居まはりだから聞いて知つちや居ねえのか、あの新家に来て居なさる別嬪よ、それ今、お前の夢枕に立つたんだ。」

「知らねえですよ。」

「何ていふの。」とお縫は發奮む。

彦次は片頬笑をして、

「お縫さん同一名だらう。」

「黙つておいでよ。」

「おしづ、さんだあ。」

「何。」

「お静さんちうだあよ。」

「張合がねえこと夥しい、お静さんぢや普通の名だ。そして此の人のいふんぢや、お静さん忠太夫と聞える。」と彦次め、又笑ふ。

「これ、駄目いふもんでねえ。何も別嬪だつて、

「何んだつて、今時の名によ、小野小町とも、ハア衣通姫ともつけられねえぢやあんめえかね。それとも威勢がなうて、悪かんべいなら、勝公と源坊が改良劍舞で名告るやうに、ひやあ、遠からむものア竹法螺の音にも聞かう、近からば根際い寄つて、暮の目にも見さい。曾我の十郎祇成、同じく弟五郎時致、藤原鎌足朝臣お静の方とでもいつて聞かせるだつてか、喃。」

「澤山よ。」

「はゝはゝ、そりや然うと、お縫坊も身を入れて聞いて居るが、お前、話といふのは其だけかね。」

「ぢや、何だ唯、其のお静さんと若旦那が路傍で出逢したといふだけの事だい、べらぼうめ、前置が豪いから、何事かはじまるかと思つたら、何の事だい、宛然徳利の底をゆすいで飲むやうな氣もない話だ。恚う、それよりか、私が方にや、新家のお静さん大世話場といふ、」

「待ちねえ、まあ、黙つて聞きねえ、筑松だつて其の位な事は知つてらい。枝のない田圃道だ、唯出

ツくはした位なら、何にもお座料は頂きません、私
なんざ出くはしつけてら、時々おふくろの口から、
親仁の遺言に出ツくはさうといふお兄い様だ、話は
これからだ。

尤も日が経つたから、些と間が伸びたがね、其の
時直ぐに引返して、御注進と駈けつけて見ねえ、停
車場の木戸を打つて、賣切れ申し候といふ、札を出
す處だつた。生靈を乗せた所爲か、何も、あゝ、凄
いほど美しいと思つて悚然としたから病みついたの
でもあるまいけれど、日が暮れて、其の時月ヶ岡か
ら歸り路、寒氣がしたのがぶりつきで、つひぞない
瘡で寝て居たもんだから、今夜はじめてお目にかゝ
るやうなわけだけれど、月ヶ岡の老人二人ね、海軍
役所の旦的、其の奥さんね、これへ今の兩名で、一
幕御覽に入れますだ、チヨン／＼、と筑松口拍
子。

住居之段

十一

「東西！ 東西！ えゝ、秋草山の月ヶ岡住居之段、役者役割、東西！ 村の若い衆、彼處の内は姓は何といふね。」

「月ヶ岡の草分だから、矢張、其の月岡だあ

よ。」

「おつと可しか、一、若旦那、月岡數夫、一、お嬢様お静、をかしいな、娘も變だ、一體私は素人ぢやあるまいと思ふが、何も褌を取つて居るわけぢやない、女房お静も些と色氣がねえ、恚うと、まゝよ、立女形として置け、東西！」

一、若旦那 月岡數夫、

一、いろをんな お静、

一、數夫の父 正左衛門、

一、おなじく 數夫の母、

一、海軍役人 駒田保、

これが敵役で、あとがお待かねの勇みだ。

一、停車場車夫 筑松、

最う一枚女形が入用だけれど、名が分らない。駒田さんの彼の派手造の奥さんだ。」といひかけて筑松は調子を張り、

「相勤めまするは竹本筑松。」

「筑さん、役者に竹本はをかしいねえ。」

「ぢやあ澤村筑松。」

「ひやあ！ こうれ、遠からん者は竹法螺の音にも聞け、近からば寄つて臺の目にも見さい、曾我の十郎澤村の筑松だあとよ、はあ、おもしれえ／＼。」
と作男は上機嫌。

「さて、幕が明くと、今いつた名のり合だ、別嬪はすぐに車から飛下りたワ、まあ！ とばかりでお前。

私アね、こりや二人で抱きつくだらうときよツとした。何其處は綺麗なもんさ。しばらく、といふと向うでも、しばらく、ツたツ切。

しばらく、顔を見合せて、しばらく黙で、しばらくよ。

薬は何も、茶碗についで、頂いて飲むとは限らねえと見えて、然うやつてる内に、ニツと恚う、血の色がさして、活過つたやうに元氣づいたがね。

數夫さん、内は何處なのツて、尋ねると、直其處だ、といつて、直ぐに彼のだら／＼のぼりの小高い處に別莊造りの新しいのと、茅茸の古い家と二軒、日あたりの稲田を前にして、背後へ秋草山の蔭を背負つたのが見えます。

其をね、恚う指をしながら、お坊ちゃん、何處かで道草をした歸途と見えて、萩の杖を二三本、此方の手に持つて、居なすつた。可い姿だつたけれど、暮方の所爲か、又あの邊は此處等町方より十日ばかり秋が疾いから、何だか、もの寂しさうな風が、私の目にも見えた位さ。

姐さんは、蝙蝠傘を杖にせい／＼呼吸を切りながら、自分の事は言はねえで、何かなすつたのツて、また尋ねるとね。内は大變なんだ、私は困つちまふツて、若旦那大ふさぎ。

はゝあ、世間か許さぬといふわけで、親御達の手前、恚うやつて、遙々尋ねて来た者を内へ入れる次第にや行かないと言ふ事だらう。いや、こりや何うも然うありさうな事だと、一からのみ込んだが、大違ひ。

それ、今いつた別荘づくりの新家と最う一軒の母家の方ね、彼處を、ほら、自轉車の旦的だ、海軍役所へ通ふ駒田さんが借りてるたらう、相勤めまするは矢張私だけれど、こりや敵役だ。

奥さんと女中を一人使つて、たしか三人ぐらしだつね、おう、若衆。

「はあ、然うですが。華族様に親類があるとやらで、えら、頭の高え奥様だあ。其の癖、おしやらくのウ見るやうに、白粉をベツたりの、ぴらしやらと赤い禪よう引ずるだアね。」

筑松は膝を打つて、
「むゝ、其よ、相勤めまする役者、矢張澤村筑松だ。」

「話の様子では、何でも其の、白粉の花見たやうな、奥さんが、新家の數夫さんに氣があるんだね。何、こりや其の時、數夫さんが自分の口から言つたこつちやないけれど、何でも行が、りが其に違ひねえ。」

「違えねえ、違えねえよ。私は彼處へも商に行くか、腰つきから、物のいつぶり、第一あの、色白で油づいて、額のてら／＼とする處が合點しねえ、密通をする人相だ。怪しからんことさ。又無理もねえよ、彼の、髯むくぢやらとお坊ちやんを、隣同士に見較べた日にや、一方はお月様の中で、杵を持つて立つて居ようといふ姿だし、一人は牛部屋と合借家で、魚の腸を掻き廻さうといふ風だ。近い處がお縫さんの目が曇らぬ鏡よ。ねえ、姐え、お前さんだツて密通をするだらう。牛を馬に乗り換へるといふが、豚と兎を取かへる一件だが、何うだね。」

「些と母様の前では御挨拶をいたしかねます。」
とお縫は澄ます。

さすがに母親が、

「馬鹿なことおいひでない。」

「待ちねえ、串戯ぢやあねえ、なるほどお前、それぢや鰹が泳ぎ出す夢を見兼ねゝえ。恐しく氣が疾いな、誰もくつついたとも何とも言やあしない、唯氣があるんだといふだけのことさ。」

其處でソレ隣だから、何の彼のと世話をやく、旦的が又勤人で、一日留守にするといふもんだから、奥方は其の緋縮緬をお引きずりで、庭づたひに、數夫さん、數夫さんとやる一件だ。

机に向つてる縁側へ、くの字なりの厭味たつぷり、手風琴で、アイ、ラブ、ユウさ。此方が其の氣更になしで、オーライと來ねえもんだから、先づ年よりを手なづける氣で、お惣菜が出来ましたからと、それね、あぶらの浮いた鳴焼なぞを御持參で、駒田が留守で寂しいんですから、此方で御一所に、なぞといふ寸法。

其の晩も、些とお飯には疾いが、お爺さん、お婆さん、こんなものを拵へましたから、御一所に食べ

たうございますね、お年としよりが胡爪きうりもみ揉もなんぞ毒どくですよ、此この鶏卵焼たまごやきを、

「筑ちくさん、大層たいそう委くはしいぢやないか。」

「まあさ、其處そこらだらうてことさ、鶏卵焼たまごやきなんぞ拵こしらへさうな對手あひてだからよ。」

「うむ、拵こしらへる、鶏卵焼たまごやきもな、恚かう捻ねぢパンの形かたちにして、菜なツ葉まと肉にくをこま切きりに交まぜた奴やつよ、屹きつと拵こしらへる、私わしなんぞ魚さかなを持もつて行いくと、フライにする、フライにするツてな、あくる日は吃きつと、昨日きのふの魚さかなはフライにしたが、不味まずかつたノと恚かうよ。恚かう旨うまいも不味まずいもあつたもんぢやねえ、フライ、と言いふのはな、體ていの可いい天殃羅てんぶらだぜ。串戲じゆつたんぢやねえ、得えてフライがる奴やつに魚さかなの味あぢの分わかるのは少すくないぜ、フライノ、フライ 水變みづへんじて墨すみとなる、十錢せん銀貨ぎんくわ燒棄やきすての掛聲かけこゑが呆あきれらあ、此間こゝ、些ちとごみに酔よつた、溜たまりの鮎ふなを持もつて行いつた、安やすいもの好すきの新あたらいものずき、鮎ふなはお前まへ、其それこそ活いきてるから、御臺所みだいどころ御機嫌ごきげん斜なならず、フライにするつさ。あくる日ひ行いつて如何いかでございましたつてよ。今度こんど一番いちばん、鱈たげをお目めにかけて、其その時ときは後學こうがくのために、お手許てもとは

拝見とやつて御馳走になつて見ようと思ふ、鱈の天
數羅さ。」

「いかなこつても、ほゝゝほゝ。」

「はゝゝはゝゝ、まあそんなものよ。處で、」

「何うしたの。」

「ト先づ取入つて、年寄たちと取膳で、晩の御飯
を食べてる處へ、旦那様お歸だ。處がね、御自慢の
自轉車だから、横づけにしても音がしまい。」

髯の方ぢや、いくらか氣振を覺つて、其の下心が
あつたものか、戸外から様子を見て、突然躍込んだ
と言ふ寸法らしいや。數夫さんの話も、そんな風だ
し、私が聞いても然う思つた。」

「夏のことなり開放し、逃げるも引くもあらばこそ、お茶をかけて持つてた處を、突然引摺倒してもしたさうで、茶碗が一つ引くりかへつて、數夫さんが見なすつた時は、其處等お飯だらけ、此方はソレ數夫さん數夫さんが堪らないから。向うの池子山へ上つて、ぶら／＼して、晩方内へ歸つて來なされると、恐しい高聲。

隣家の主人の聲だから、見えないやうにして、密と出格子から覗いたんだとさ。

先方は血眼だ、腕まくりで眞中に打すわりの、ヤイふんぞりめ、おのれ、主人の歸る時分時も構はないで、此の状は何だ、其分に置く奴でない、覺悟しろツさ。

奥方は俯向になつて、ゆすり泣をして居ると、年寄は平あやまり、お姿さんなんざ、おろ／＼立場を失つて居るといふ始末。これはと思つて飛込まうとしなされる時、姦婦！ さあ數大の青二才は何處へ逃げた、出せ。二人ともふん縛つて煙硝の匂を嗅がせ

て遣ると、泡をふいてら、」

「亂暴だ。」

「ひやあ、これ那樣騒があつたかね、えれいこつた。」

「まあ、聞きねえ、だもんだから、何、まさか面と向つちや、男と男、いくら暴れたツて指一本さしはしまいと、思ひなすつたさうだけれど、事が面倒だから入るには入られず、然うかと言つて立迷つて居るのを先方が見附ければ跋が悪し、引返して、其の地藏様の前の處まで來なすつたんださうさ。外聞が悪くツて近所の百姓家へ中裁も頼まれず、年寄に氣を揉ませるのも不孝なりと、弱つて居なすつた處だ、——とかいつまんで、お話だ。」

成程それが、大聲が聞えらあ。いや、一通りなら
ず吼り立つて居たと見える。

でね、丁度可い處へ來てくれた。お前一ツ工夫はないか、私も實は弱つたツて、意氣地がねえと云やそれまでだけれど、内氣な方だ、お氣の毒な、大に打てゝ居なさらあ。

姐ねえさんがね。

あの、其その御ご夫ふう婦ふは、いつも仲なかが悪わるいんですか、と落おち着ちついて聞きく奴やつさ。

旦たん的つくはアノ柄がらで月げつ琴きんを弾ひくとね、時とき々／＼手て風ふう琴きんと合あせるさうだが、眞ほん實たうか。」

「やるですが、はあ旨うまいもんだ、此この節せつぢや、村むらではやる改良かいりやう劍けん舞ぶの、滑だう稽けう唄たを覺おぼえて、コラサノサ、ドツコイサなあんてね、聞きかせるでがすよ。」

「其それだ。」

數かず夫をさんが、いつも合あ奏はせものなんぞをして、仲なかが可いいんだと、話はなすとね。

大おほ方かた然さうでせう、お髯ひげさんが、やツかんで、心こゝろにもないことをいつて怒おこるんでせうから、人ひとの見みる前まえで打ぶつたツて叩たたいたツて、引ひ摺ずつても内うちさへ歸かへつて行きや、何なんでもないんです、打うつ棄ちやつてお置おきなさい、静しづまるまで此こゝ處ちで一ぶく服ふくしようぢやありませんか、若わかい衆しさん、あの、早ま附つ木ちを持もつちや居ゐませんか。

恚いかう私わたしにいふんです。

數夫さんがね、

飛んでもない、然う悠々して居られるもんか、頼むから、老人の身にもなつて御覽、と、型なしだ。然うねえ、お爺さんやお姿さんが氣をお揉みなすつちやお哀相だ、眞個にあなたはこんな事にかけると仕様がないよ。

私も先のやうぢやないんです、餘所の人と口を利くと、最う打倒れさうに頭痛がするんだけれど、何うにかして上げませうツて。

全く、それ、日向を私が危険かつた位に竄れて居るんだからね、これで何うしてと思ふのに、些とも騒がないで、つむりが重さう。蝙蝠傘をつきなから、片手に薬瓶を持つたまゝ、徐々さきへ立つて、彼處をたら／＼と上つて行くと、數夫さんが其のうしろへ、私は見たさも見たし、俵を曳寄せて置いて、革鞆を持つて、おともさね。」

十四

「そこで新家の門口だ。お婆さんは跣足で土間に立つて、曲つた腰も据らねえで、お前、手を上げて宙を拝むやうにして仰へて居るとね。

退け！ 蹴飛ばすぞ、こら、己の妻を己が連れて歸るに、何を留める、其とも何か、不義でも汝が兒が可愛いんで、惚れた此奴まで可愛いなら、待て、今、處置をしたあとの、體だけ返して遣る。ツて、隊長、奥方の手を鷲掴みにして、土間へしよ引き出さうとして居る處よ。奥方は、身體半分沓脱の上へ宙に釣られて、大圓鬚の根が、引掴めえられた手の肩も抜けさうな腕の處へ、がツくり恚う潰れてな、眞蒼になつて顔をしかめてよ、取亂した體で、疊のへりを、足ではたば／＼とやつて、柱にしがみついて居た處だ。何の事はねえ其の白粉の花を、根こぎにして引摺つた334といふ形。

お爺さんは火鉢の處に投首をして、蹲まつて居なすつたツけが、見兼ねてよろ／＼と出て、まあ、

旦那様 と、皺だらけな手をぶる／＼震はしながら、袖へ縫んなすつたのを、ものをもいはねえで、向うへ突飛ばしたから、尻餅だ。駒田さん亂暴です、ツて、數夫さんがずつと土間へ入ると、何を。……と睨みつけた。

髯の顔色、拳を握んだ、あの手で胸板を突かれた日にや、一たまりもあるめえと、此處で何よ、澤村筑松本役よ。」

「何うした、若旦那の加勢をして、髯の足へでも喰ひついたか。」

「いんえ。」

「目潰しの泥でもハア打かけたんべい。」

「いんえ。」

「筑さん何うしたの。」

「私あサリクだ、倒れて怪我をなさると悪いと思つたからね、土間を入つた右ツ手に、一寸下駄でも入れて置かうといふ、半間の物置があるがね、其のお前、開戸の立てつけが悪いと見えて、

澤庵石か壓へに置いてあつたから、突然片手で引摺

んで、ボンと木戸の外へ抛り出した。」

「成程本役だ。」

筑松も打笑ひ、

「其處へ姐さんが入んなすつた。」

何をなさるのよ、ツて、其ン時、掴み付きさう
だつた鬚の前へ、數夫さんを背後へ庇つて、靜に立
つたと思ひねえ。あまり目覺しい美しさに、旦的
はきよとんとし、しばらく黙つて居たツけがね。何
だ、き様ツて云ひながら、大の字形にはだかつて居
たのが、棒立になつて了つたあ。

まあ、お放しなさいよ、酷いわねえ、と、澄ま
して、奴が奥方を引摺んだ手を持添へて、**＝**放すと、
へむ、放します。

お初に、私は彼の數夫さんの女房でございます。
といひながら、藥瓶の包を落すやうに疊に置いて、
ばツたり上框へ腰を落して、こゝで切なさうに呼吸
をつくくと、また顔の色が悪くなつた。

それでも、ひらりと茶の間へ上つて、お父さん
お危うございますよ。ツて、お爺さんの傍へ坐つ
たと思ひねえよ。

奥方は放されて身體を横に、其のまゝべた／＼と
摺り退いて、鬚をがツくりと遣つたまゝ、くひしば
つて、しく／＼泣。

お婆さんは二人が入つたのを見ると、身をかはし
て戸外へ出て、木戸につかまつて呆れ顔をして、内
の様子を覗いて居なさら。

其の背後境の垣根越に、駒田のお三どんが、うろ
／＼して居るといふ次第だ。

姐さんがね、袖を返して袂の中から、紅い小さな
珠で留めて、細打の紐にわがねて持つてた手拭を出
して、立つて柩から、突立つた髯に身を寄せながら、
アイ、お母さんのお御足をといふと、數夫さん
が受取つて、砂を拂つてあげる奴さ。

私もぐツと氣を利かして、へい、お穿きなさいで

も
以つて、今脱いだ姐さんの藤表の後齒といふのを、
敷居際でお姿さんの足許へ揃へましたね。

彦次、やい、手前なんざ、氣が付くめえ、不斷心

がけがあると違つたもんだ、阿母、私あ此の通り孝

行だぜ。
」

「さて、一同舞臺正面を横に見て、姐さんを輪形に取巻いた、こゝで髯の口からいざこざ澤山、いや、いふも可煩え、密通一件の混雑だ。姐さんがお前、呼吸苦しさに笑つてな。」

もし、數夫さんにや、こんな佳い女房があるんですから、人様のものなんか、意地汚なはいたしません、御心配遊ばすことはないんですサ 何うだ、聞えた理窟だらう。

此方あ虎髯をむず／＼さして、き様、女房だ、女房だといふが、些と亭主に氣を注ける、見て居ない留守の事が分るもんか。と遣るとね。

三年一所に居ないたつて、大丈夫、浮氣をするかしないか見極めない位なら、はじめから良人にはしませんツさ。

此奴、耳が痛からうぢやねえか。

其も私が見ても氣が揉めるやうな方なら知らず、

よく良人の氣を知つて居ますが、此の奥さんのやうな柄の方は、嫌なんです。第一あなた、御自分の持ちものだから、人が取らうかなんて自惚れて在らつしやるけれど、搦摸が見たつても、欲しがるほどの玉ぢやないわ、ツて然う云つてね、仰向いて目を瞑つて罎の口から薬を一口。

此時は旦よりか、奥方の、じろりと見た目が、恐しく凄かつた。

すツくり立つと、蹈みしだいて、前へのめらうとした裾を蹴て、ばら／＼と土間へ下りて、私はもう、と金切聲。

こら！ 何うするか汝、何處へ行くかつ といふのを機かけに、髯もどか／＼と出て、追ひかけたがね、沼田の沼へでも駈け出すかと思ふと、自分の内へ飛込んだんでさ。詰らないのは垣根に立つて居たお三どんで、畜生、何を見て居やがるんだいつて、奥方が癩癩紛れ、駈出しざまに平手で一ツ、ぴツしやりと啖はしたらう。

わツと喚おめいて泣なく處ところを、馬鹿ばかツてえと、髯ひげが、や
り場ばばを失うしなつた握拳にぎりこぶしで突飛つきとばしたもんだから、いや
可哀相かはいさいうに、どツしりと返かへつた。」

「おや／＼氣きの毒どくな。」

「若い衆わがしゆ、お前まへの情郎いろぢやねえか、それだと黙だまつ
ちや居ゐられねえ處ところだ。」

「なにハア、可いい氣味きみでがさ。」

「さては振ふられたな。」

「は／＼は／＼、月つきヶ岡をかぢやよく振ふられるぜ、駒田こまだ
の白粉おしろいの花はなをはじめとし、若い衆わがしゆお前まへもかね、私も
かへり路みちに五丁ちやうなはて躡ひとふりあで一降浴ひとふりあびた。日ひが暮くれた時じ分ぶんよ、
もツと後あとを見て居ゐたかつたけれど、立たつて居ゐる幕まくぢ
やねえから、革靴カバンを差置さしおいてね、ハイ、お荷物にもつはこ
れへ置おきます、何どうもおめでたうございますツて、
言いつたら、御苦勞ごくらうさま様さまツて、駄賃だちんの外ほかにお手てづから二
貫文くわんもん。」

變へんにはじめツから寒氣さむけのして居ゐた處ところへ、雨あめをくら
ツて、ソレ五日かばかり寝ねたと言いふもんだが、實じつはね、
あとは何どうなつたらうと思おもつたに、お睦むつまじくツて結構けつこう
だ、何なんしろ顔色かほいろがよくおんななすつて、私わつしも蔭かげなが

ら嬉しいや。

しかし誰も自分が悪いと思ふものは無えから、長
い間の事た、駒田の徒に怨まれなさらねえけりや可
いが、役人風を吹かして、町から村へ一杯の肩幅だ
からね、些と面倒よ。若い衆さん、何ぞ、いざこざ
のあるやうな様子はねえか。」

「はあ、何にもそんなえな氣ぶりはねえね、混雑
は敷ん中へ伏せたと見えて、誰も村の者は知んねえ
でがすが、大方何だんべい、仲なほりが出来たんべ
い。昨日も一昨日も相かはらず、隣同士行交をして
居なさるだ、先の中よりか、却つて何よ、旦那の方
が役所から歸ると、月ヶ岡の内へ遊びに行くやうだ
がね、雨降つて地イ固るだ。ものゝ、字が分りさう
な人は彼ん達二人だで、仲好くしなさるが可いだが
す。」 作男も眞面目になる。

彦次はしばらく考へ、

「はてな。」

「些と、しかし考へもんだぜ、今の話の様子だと、なかで第一語らないのは駒田の奥さん、其の白粉の花だ。」

數夫さんには振つけられる、痛い思ひはする、其の上道ならねえこつてもお前、惚れた男の前で、小酷く恥を搔かされちや、條違ひでも怨まずには居られまい。

男と男は薩張して、解ける時は解けるものゝ、女同士ぢや然うは行かねえ。

道理こそ、駒田の奥さんは、新家の姐さんに變な素振をすらあ。」

「どんな風だ、お前見たか。」
「見た、其が何だ、先刻彼の御祝儀が出た一件の時よ。」

一昨々日の晩だつけな、今年はよく降るが、夏へ

入つても一番といふ大雨だつたのは。然うか、然う
すると一昨日の朝だ。あの、恐しい雨は、お前、降
つて降つて降り抜いて、あけ方三時頃にはからりと
星空になつたい、風は好し、一地引、上つたのが、
丸鰯よ。澤山はなかつたが、ざつと濱近を廻つて、
直ぐに月ヶ岡まで伸したもんだ。

大降でお前、皆な洗ひ浚ひ泥を流したもんだから、
何時も泣かせられる五丁躰なんざ、ヒヤ／＼可い心
持で一ツ飛と。

新家へ行くと、若い人達が閉め忘れたと見えて、
木戸は八文字に内の方へ開いて居ら。

格子戸は錠が下りて居た、まだ、疾いんだからな、
靄が一面、庭にや朝顔がしつとりと咲いて居た。竹
垣の圍内だけは新しく地ならしをしたと見えて、其
の瑠璃色の花ばかり、草一ツ葉生えちや居ねえけれ
ど、ぐるりと取まはして山の名だけに秋草が一面だ、
綺麗ツたらないぜ。

魚屋でございと、二聲ばかり呼んだが返事がねえ

や。其處で何の氣なしに、雨戸の隙間から覗いて見た。

「馬鹿、覗いたか。」と筑松穩ならぬ顔をする。

「可いぢやあねえか、生物を商ふだ、何時までも立つちや居られねえ、」と先づ汝を極めつけて置いてよ。實は心配でならなかつた、それ、此の町は龍宮へ降り埋められるかと思ふほどの雨だつたらう。此方人等さへ戸外へ出て、星を見た時は嬉しかつた、路で濡佛の顔を拜んでも、いや、御無事と云ひたかつたわ。

隣はあるたツて、一軒家同様、殊にな、夏場海水浴のお客を目あてに、そら強盗ものが横行するだ、ちら／＼方々で物騒な話を聞いている矢先だから。

と片目をついぶると中が見えたが、戸外は霽で、座敷は未だ眞ツ暗だ。

すると蚊帳が二張。

しをらしいぢやねえか、ちら／＼ちら／＼と未だ

光が残つて、蚊帳の裾だの鴨居の邊りに見えたのは
螢だ、どしや降を凌ぎかねて立てこんだもんだら
う。

けれども、其の時はそれも気がゝりだ、構はずド
ン／＼と叩くとな、はいと返事をしたのが別嬪だ。

威勢よく、魚屋でございと呼ぶと、今明けますよ
ツて、しばらくして、蚊帳をからんで、ト膝をつい
て、それから茶の間を通つて、土間へ下りて、急い
で戸を開けて出なすつたがね。

腫ぼツたい目で、お早うツさ、銀杏返がばさ／＼
して、お前、何だらうぢやねえか、寝亂れ姿と言ふ
んだらうぢやないか。」

筑松は娘を見返り、

「姐さん、餘り身を入れて聞きツこなし。」

「大丈夫、繻子の帯をキチンとしめて居ました

ぜ。」

お縫が、

「當前さ。」

彦次はかぶりを振つて、

「處かお隣のは然うでねえ。丁度、其のトタンに木戸の處を通つたがね、縁側の戸が一枚開いて居たから、ずつと朝晴れに一運動といふ氣取だらう、白粉よれのした、襟のくねつた、寢衣の浴衣に桃色の扱帯をだらりと結んで、大髻の束髪だ。」

「彦さん、束髪に大髻はをかしいねえ。」

母親も口を入れ、

「それぢや毛の薄い私のなんざ、チヨン鬘の鬘と言はなけりやならないなう。」

「大きに、いや、それでは大づかみの束髪か、何うも娼妓のやうな其の風ツたら無かつたぜ、然もお前、大儀さうに褻さを蹴つて歩行だ。」

お早うツて、別嬪が如才なく聲をかけたがね、黙つて居ら。

再度、もし、奥さんお早うございますツさ。

なるほど表向仲直りはしたらうよ、腹藏のねえ挨拶

撈振だア、其を何と、あいとも云はず、振向きもしねえで、しよたノ、雨戸の中へお引込み。

およしなさい、お早うも何もあつたもんぢやねえツて、私はね、姐さんに低聲で然ういつた。胸氣ぢやあねえか、何ぼ、頭が高いたツて、何さ、彼の奥さんのは頭が高いいんぢやねえ、鬚が大いんだい、處置ぶりが氣にくはねえ。

先刻のは此時の話だ、鰺はいくらだと聞きなさる。阿母の前だがね、私は人を見て掛値なんざ云ひません。

「分つたよノ、」

「十で十五錢頂きますツたら、高いツてよ、さあ、此處で一ツ假色だ、頼むよ。」

「遣るべいかね、ひやあ、これ！ 遠からんものは竹法螺の音にも聞け、近からば寄つて暮の目にも見さい。」

「曾我のぢやねえ、鰺の値をつける處だ、お縫さん一ツやんねえな。」

娘は襖先を括枕のやうな兩膝に挟んで、蹲んだまゝ、團扇を半面にかざして、仰向く姿勢で、

「些とお負けなねえ。」
喝采々々。

「此の子は。」と母親苦笑ひ。

「何しろ十五ばかりおくんな、といふから、蓋を引くりかへして一、一、一さ、其奴を持つていそ／＼臺所へ入なすつたツけ。

火鉢の引出をがた／＼とね、蓋と一所に持つて出て、アイお代。見るとそら小銀貨か一ツだらう。十ヲで十五錢、可しかね、掛値のねえ處をお前、十五で、十錢は酷からう。

もし、是は、と云ふと、可いよ、おまけな。

とおいでなすつた、こりや酷い、といふ内に、すつたすつた入つちまひなさるから、嬢さん、不可ませんと、私も土間まで入ると、遁げるやうにして、臺所の前で、背向きに坐ツちまつて、澤山よ。とある御意だと思へ。

其の肩を揺ぶつて、拗ねいといふ工合なんても

のはなかつたい。まるでお姫様だから下郎、ねえ、
ねえ、としりごみだ。

言を返すも恐れ多いやうな氣がして、意氣地はね
え、其のまゝ、引返したが、鄰家へは、癩だから聲
を懸けず。

田圃路へかゝつても、をかしいやうな、撥つたい
やうな、馬鹿々々しいやうな、然うかと思ふと嬉し
いやうな、難有いやうな、變な心持がして、獨りで
にニヤリ／＼、何時か足取も遅くなつて、又ニヤリ
さ。

こりや不可えと、思ふ内に、矢張ニヤリと笑ひや
あがら、呀！こりやならぬ、と、うんと氣を入れ
ると、すぐに下腹から、ニヤ殿がおいでなさる。自
然天然妙希烈自然天然妙希烈だ、吃逆のやうで止ま
らねえ、口の端を抓るとの、其が又ひとりで可笑
しくなつて、了ひにや我ながら情ない、聲に出て、
へゝゝゝゝ。

一同、一吻々々々吻。

「まるで魅つままれた鹽梅あんばいだね。魅つままれたといや、正しやうのもの、自分じぶんで此この腕うでへ喰くひついて見みた一件いっけんが未まだ其その他ほかにあるんだぜ。

何なんだといふと、其そのお前めえ、ニヤリノゝで我われながら變へんだから、待まて、こりや一合がふあふ呷あふりつけて出でかけようと、朝あさツから不ふ料簡れうけんを起おこして、商あきなひ歸がへりに何時いつも寄よるだ。あの、月つきヶ岡をかを向むかうへ出ではづれの、汚きたない荒物屋あらしものや兼けん帶たいといふ一軒けん茶屋ぢやだ。狸たぬきが化ばけたやうな爺ぢいさんが、獨ひとりで商あきなひをして居ゐる内うちよ。

今こん日は、か何なにかで、ズツと入はいると、奥行おくゆきも何なんにもねえや、素麵箱そうめんばこへ古莫蔭ふるもくげを切張きりばりにした奴やつに腰こしをかけ、焼酎せつちゆうを一合がふ、とやると、驚おどろきたい、數夫かずをさんの御兩親ごりやうしんだ。正左衛門しやうざゑもんさん御夫婦ごふうふがお前めえ、さしむかひで居ゐるだらうぢやあねえか。尤もつとも四五日ちふりつ降續ふりついた不漁しけで、彼處等あそこいらは廻まはらなかつたけれど、餘あんまり變かはつて

ら、然もお前、其の人達の嫁御、嫁といふでもある
めえが、數夫さんの情婦見たやうなもんだから、先
づ其の嫁さんにやられて、ニヤノの次第なんだら
うぢやあねえか、全く腕を噛んで見たぜ。」

「よく魅かされる男だな、鯉の泳いだ夢なんぞも、
何うかといや、矢張魅まれの方に近いんだ。」

「そりや魂消たんいべい、あの茶屋の爺さんは何
も狸の化けたのぢやないで、相生寺の隠居和尚どの
が、剽輕な人で、還俗をして、はじめた。何が其
の剽輕もので、此中、急に氣が變つて、諸國行脚
に出てえだから、店を譲るちうのを、正左衛門さん
が引請けたあだよ。難有いこんだ、嫁様が出来たで、
年寄が居ては、氣詰りだんべいと、はあ、新家を明
け渡したものでがな。」

「何、それぢや新家には若い人切か。」

「いんね、行ツ切といふでねえ、行ツたり來たり
だあ、大抵夜になれば歸るだがね、雨でもひどけり
や荒物屋に泊るでがす、それだツて狭いから、年寄
たちは二人とも新家をあけることは滅多にねえだ

よ。」

「そんなら可いが、串戯はよして不用心よ。餘計なお世話だが、ねえ、姐え。」

「知らないよ。」

「それから升で遣りながら、鯨を十五の話をする
と、お爺さんは大笑ひ、お婆さんまでがほく／＼も
ので、可愛い娘ぢや、お前さんには氣の毒だツて足
りず前を、賣溜の中からばら錢で出しなさら、飛ん
でもねえ、不足を言つたんぢや夢さらねえんで、實
に世帯氣が出なすつて、おめでたい事ですと、平に
あやまると、此方も祝の氣で進ぜるツてな、去年、
田地田畑を賣ンなすつたが、何うして未だ御大氣な
もんだ、其の足りずまへを下すつた上に、焼酎一合
先方さまで御馳走よ。」

筑松はづいと立つて、背後から一ツ魚屋の背中を
撲はし、

「可い加減にしねえか、それぢや代濟だものを、
然も御馳走になつた上に、先刻の御祝儀は何うだ、
三重取にせしめてやあがる、太え奴！」

「酷いことねえ。」

彦次は落着き拂ひ、

「其處は私だ、唯取にするもんか。ちやんと心得があるんだい。先づ、御祝儀とあるから、仔細はいはねえで、難有く頂いたと、魚は總了ひとなつたら、今夜一番、八幡様まで、見物に出かけるといふ胸算だ。」

處で、新家は路だから、行きがけに寄るつもりよ。其處で見ねえ、向うの土間に梨と一所に馬に積んで持つた來た、本場の南瓜が、お膝送りといふ身で、いかいことおはします。

數夫さんが、梨を袂へ入た時、姐さんが、南瓜も買つて行きますうツて、そんなに持てるものかと、叱られたのを御存じだらう。」

「彦さんが氣前を見せて、お土産に持つて行くだ。寓事此の通り氣がつく男だからね、何うも所帯が持てません。一言もあるめえ。」

と鷹揚にずらりと一同の顔を睨めまはし、北叟笑をして得意顔。

お縫が、

「だつて月ヶ岡邊にはいくらかも可いのがありさうなもんだね、お饅頭にでもすると可いよ。」

「いんね、魚屋さんの思ひつきが可かんべいよ。」

村方にや、いくらかもあるだし、第一正左衛門様の畑に出来たゞ。すつかり田畑を賣りなさつたで、去年の今年でがす、近處から、おすそ分けしたうても、何かハア面あてがましいで持つていくわけにならねえだ。又向う様でも賣つてくるとは言ひ悪かんべい、其だで、丁ど可いでがすよ。」

「ソレ見ねえ、お誂へ通りに行かあ、さあ、然う事が極つたら、徐々出掛けるとするだ、時にもう何時だらう。」

母親ははおやが踵きびすをめぐらし、雇女やとひが凭よかりゝつて睡ねむつて居ゐる、柱時計はしらどけいを及腰およひこしに視ながめたが、

「まだ十時じゅうじ打うつたばかりさ。」

「夜よが長ながくなつたこと。」 お縫ぬいも立たつ。

「丁度ちやうど可たからう。」

と彦次ひこじは仰のつけに反そるやうにして、顔かほを出だしたが、軒下のきしたから空そらを見みると、

「おゝ曇くもつた、眞白まっしろになつたぜ。」

「お星ほしさまが餘あまりキラ／＼なさると思おもつた、降ふりか不知しら、」

「大たいしたことはなからうが、どツと來くりや素裸すっぱだかだ。」

「私わしも同士どうしに行いきますべい。」

「それぢや阿母おつかあ、南瓜たうなすを。」

筑松唐突ちくまつだしぬけに横合よこあひから、

「幾いくつだ。」

「え、」

「唯ただつた一ツか。」

「二ツよ。」

「彦ひこさん、三ツにおし、然さういすると一錢せんまけて上げるから、丁ど御祝儀ごしゅうぎだけ、帳面ちやうめんづらが可いいよ。」

と娘が人の悪いこと。

「何よ、そりやな、何よ、私だつて天秤を擔いで行くんぢやなし、然うは持てねえ。」

「手傳つて下げて遣るだあよ。」
「ぐツとも云はず、天窓を撫でた。」

「思ひ切つて然んなら然うか、結へて下げるやうにして呉んねえよ。」

「かうれ、然う兩手では草臥れるで、お前さあ一ツ持たつせえ、私が二ツ持つてやるべい。」

唯見る沙悟淨の體にあらす、神女の瓔珞にあらす、狂人の笹にあらず、南瓜を結んで振分けにした繩からげの眞中へ、鼻毛の長い顔を出した。

「いよ、どツこいしよと、恚うするだ。」

「似合つた、似合つた。」

「はあ、似合つたツべい、一番此の思ひつきで、八幡様で踊るかい、あら、ドツコイサノサ、ド2ツ

コイサ。」

作男は腰を捻つて、ひよいと、チン／＼の手つきをする。喝采々々。

すぐ其の腰を左右に振つて、トントン／＼と出て、
一足退さると、ばツさり、兩手を柳に流して、

「チヨツタラチヨイト、あら、ドツコイサノサ
ドツコイサ、」と踊る。

ウタ「朝に咲き、夕にしをるゝ朝顔さへも、思ひ
／＼の色を持つ」

「思ひ／＼のネ、思ひ／＼の、ちよツくらちよい
と色を持つ はア今晚は、」と摺違つ

て暗を行く。

五町罫を、半ば月ヶ岡の方に越した處で、

「誰？ 數さん。」

ステーション前へ
停車場前から歸りがけ、二人ならんで、お静が手
に、鯉の鰓尻赤う、提灯を提げたのは數夫である。

「近村の者だらう。」

「ぢや、大方、八幡様へ行くんでせう、知つてる人でないのに可笑いよ。」

「此處らでは路で行逢ふと夜なんざなほのこと、皆聲をかけるんだよ、此方でも挨拶をして遣らないと、澄ましてるとか、權高だとか言ふんです。お前なんざ婦人だから餘計に氣をつけて、はい、今晚は、位なことを云つて置かないと憎まれます。」

「アイ。」といつて傍目も觸らず、裳はら／＼見えがくれ、蹴出の水色涼しさう、提灯のあかりに搦んで、ほの／＼とある一條路。山と山とが藁のやうに海濱へ擴がつて、月ヶ岡の方に狭くなる、左右は稲田、前後に人も見えず、前途に茫乎とイんだは、村の取着なる瓦を焼く大竈で、黒い坊主が坐つた形。

「大分足早になつた、恐いのかい。」

フト砂道で、音のせぬ下駄を留め、

「數さん、提灯と取かへて下さいな。お魚を、狐

が欲しがると厭だから。」

「可し。」

お静は寄り添ひ、

「さあ、急ぎませう、お晝が晩かつたから、未だお腹は空かないけれど、お魚が食べたくなつた。」

三枚におろして、中落を煮て、あとは醬油に漬けてさ、片身は刺身にしませうね、庖丁の手際を見せますよ、旨いものよ。」

黙つて居る。

「阿母さんも、阿父も、今夜はお留守なんです、いけないねえ、歸らないつて云つておいでなすつたつて、あの、荒物屋の方でお泊りなの、」

「否、玄武寺といふのに講があつて、お詣りなすつたんだが、晩くなるからお泊りだよ。方丈とも懇意だから、」

「お寺は何處なんです。」

數夫は左を指して、提げたものを持直し、
「向うの山中さ、お前、然う提灯を差上げちや見えやしない。」

お静は提灯を背後へ廻した、海を去ること十町餘、町に遠く、山に包まれた、畷の盡きんとする處、頸の白い、洗髪浴衣の色も鮮やかに描かれた。

透かすと池子山朦朧たり。

「彼處なの、大變だわねえ、まるで雲の中ぢやありませんか。おや／＼、ぼんやり眞白になつて来た、まあ、曇つたわ、あら、山の裾の方が雪が降つたやうになつたよ、一寸、」

數夫も振り仰ぐと、星が隠れて、路は却つて見る目に明るく、恰も銀河が下りて来て、野中へ擴がつたやうである。

「夕立か。」

いふ時、轟々といふ響、稲葉が揺れて翻つて、墨のやうな水田の根から、振ひ出すかと螢がばら／＼、消ゆると颯と風の音、思はず男の手を緊乎と取つて、お静は露で冷い手に力を籠め、

「雷さまけ!?」

「何、汽車の音が、」

聞き澄して、

「海が鳴るんだ。」

「あゝ、然う、然ういや先刻、地引を見て居た時分も、浪が荒かつたわねえ。一寸、一寸。」

「忙しいね、何だ。」

「山の裾の白いのがむら／＼と動いて居ますよ、

浪が這つて来たんぢやなくツて、

「雪が出たんだよ、」

「そんなら可いけれど、彼處へ浪が来ようものなら、阿父さんも阿母さんも歸られなくなつて了ふよ、

何だか氣味が悪いねえ。急に夜があけたやうぢやあ

りませんか、二十六夜なのに、未だ月の明ぢやない

んですもの、」

「白浪が映るんです、此の邊はね、時々空が海の

色と同一になるよ。」

「あゝ、吃驚した、私、」

「一々何の事だね、黙つてお歩き、見つともない、掴まつてりや澤山です。」

「だつて、だつたつて私は、」とお静は呼吸をはずませながら、物好に振りむいた。

「恐いから一生懸命に歩行してるのに、いけすかない畜生だよ。」

「犬も何にも歩行きやしない。」と齊しく見向くと、莞爾して、

「否、此の瓦を焼く竈ですよ。何時でも何時でも、人を、威かすんだもの、知つてゝも吃驚するわ。ぬうと目の前へ突立つてゝさ、癩に障るツちやない、厭な入道だよ。ヤイ、」と提灯の柄を逆に取つて、此の邊一むら茂つた薄越に、手の届かない處を突かうとすると、ひやりとした一雫は、葉末の露の散つたのではない。

「何を語らない眞似をして居るんだ、見たが可愛い、降つて来た、」

「可くツてよ、濡れたつて浴衣ですもの、ひやッ

こくツて可い心持だわ。」

故と落着いて、悠々と歩を移す。

「困るな、何も依怙地になることはない。最う一

呼吸だ、急げといふのに。」 「厭よ、」 と打遣

つたやうに云ふ。

「草臥れたか。酷く降つて來ても、お前駈けるこ

とは出来ないだらう。」

「卯の年ですもの、飛びますよ。」

「勝手にするが可い。」 と振りもぎりさうにす

ると、入交ひに後れた姿を、慌しく縋りついて、

「不可ません！」

「それ御覽。」

「おや、人が恐がると思つて大層威張るわね、一

寸。

「何だ。」

「こんなことをして歩くのは、はじめてだわ、

滅多にないことなんですもの。」

「滅多にあつた日にや色狂氣だね。」

「ですからさ、雨はふるし、人通りはなし、丁ど

土手づたひのやうな路だし、お誂へ通りぢやありま

せんか、雲脚早き雨空も、ツン、ツル、ツンツ、

ツン、テツ、トン、チンノ、テン、思ひがけなく
吹き霽れて・・・一ツ打つけて貰ひたいねえ。」
「何がお詔へなもののか、それ見な。」といひか
けて竈の前を折曲り、薄を抜けて、村の入口、又一
丁場、吹曝へ出たトタン面を洗つて横ニがさツとかゝ
る。

お静はさすが婦人の身、髪かみの濡ぬれるのを厭いとつたか、
頸うなじを雨あめに打うたれながら、横よこざまに袖そでを翳かざすと、數夫かずを
は手疾てはやく麦藁帽むぎわらぼうの紐ひもを解とくより、衝つと手てに持もつた、
が我われにもあらず婦人をんなの肩かたに差さしかけた。

「だから言いはないこツちやない、お前まへ手拭てぬぐひは持もた
ないのか。」

「可よござんすよ、もツと降ふれノ、此間こなひたの、あの
螢ほたるが澤山たくさん飛とび込んだ時ときのやうに、大雨おほあめになれば可い
よ。」

と些ちと激はげしく云いつた。

「え。」

「然さうすりや、又またあなたの蚊帳かやへ入はひるもの。」
「今晚こんばんは。」と唐突だしぬけに、向むかうから來きて通とほり過すぎ

た者がある。

稲葉摺に右左、二人は颯と路を開いて、お静が透さず、

「今晚は、」

「はい、お休みなさいやし。」と生ぬるい野良

調子、降にもかまはず、のツさり行過ぎたと思ふと、

早や霽に包まれて姿は見えず、中音で、

「あら、どツこいさのサ、どツこいサ、」

「暢氣だことねえ。」

「何方が暢氣だか分りやしない、恚う降つて來ち

や、義理にも駈け出さなくつちや形が悪いよ。さ

あ、一奮發遣つけよう。」「逆も、」

「置いて行よ、」

「可ござんすとも、」といふ口の下から、ばた

／＼と駈け出して、

「厭よう！ 數さん。」

月ヶ岡へ入らうとする稍手前、秋草山の麓に迫つた處が、岸破と缺けて、五六間が間古い一帯の壁の趣がある。並べて横に細長い小家をかけた、唯竹の柱に茅の屋根ばかりなのは、少し離れた前途の、椿の古木の根を潜つて、路を横ぎつて田圃に注ぐ用水の流に沿うて、山の根を十五六間、こゝに石段を築いた上なる、觀世音の御堂大破につき、再建の用材を入れてあるので、纔に廂の出た下へ、若い同士は花やかに駈け込んだ。

「おゝ、切ない。しどいことね、何うも餘程苦し
くツてよ、少し休まして下さいな、あなた、濡れま
したか。」

片手で海水帽の雫を切つた、數夫は清らかな腕ま
くりで、これは脊が高いから、低い廂に背屈をした
が、右手には、鯉を結へて提げて居るから、肩のあ
たり、胸のあたり、單衣の上へ、頬摺して、
「何
大したことはない、お前、何うだ。」

「平氣なものよ、浴衣だから。」

「憚りながら私だつて、着ものを庇ふのではないんです。二人でびしよ／＼ぢや、外聞が悪いからのことつたよ。」

「何うも相濟みません。」とあでやかに笑つて

横を向くと、數夫は憎いと思つたやうすで、

「何しろ此の鰹が荷になつて仕やうがない、此處へ置いて行かうぢやないか。」

お靜は向き直つて、涼しい目をまんじりと顔を見ながら、

「止して下さいよ、勿體ない、あなた串戯ではありません。」

「急に降つて來た工合といひ、何うやら此の魚を狐めが見込んだやうだ。」

「厭ねえ、」と身を震はすと、ばつたり取落す、提灯は口を開いて、蠟燭がちよろりと出る。消えては大變と、早速に拾ひあげた數夫の手に、ぷら下るやうにして、袂に取着く、黒髪がはらりと。

「おゝ、冷い、そらお見、恐しく濡れたぢやないか。」

「雫が垂つて氣味が悪いの、」

「其上そんなに恐がりの癖に、何だつて負けない口を利くだらう。最う可し、可し、何の狐なんぞが居て堪るもんか。尤も此邊に澤山居ただけれど、横須賀へ行く汽車の音だの、鐵砲の音が聞えるやうになつてから以來は、見ようたつて見られやしない、臆病ツちやありやしないや。」

「だつて驚かされると、出るやうに思ふんですもの、さあ、提灯を持ちませう。」と仰向けに亂れ髪を颯と振つた。

「又大變に降つて來たよ。」

「其の割にや身體にかゝらないが、待ちな、向うが芋畑であらうも知れぬ。」と、ずつと雨の中へ灯を向けて、唯見ると、百姓家の外圍、路より少々高い位、二坪ばかりの夕顔棚、雨は其處にのみ篠突く如し。

「成るほど。」

「光秀が出る處よ。」

數夫はこれには答へないで、今夕顔棚を透かさうとして、廂から半身を出したまゝ、一足外へ出て、

あたり あたり 四邊を みまは 二して、背を せなか 捻ぢるやうにして、小屋の こや 屋根 やねこ 越 し に くわんのんだう 観音堂の方 ほう を み 見た。

「さあ、お寄越 よこ しなさいよ。」と事 て を さしの 差伸べる
と、心 こゝろ すともなく背後 うしろ へ廻 まは して、お静 しづ を くら 暗うしな
つた、情 なさけ らしい提灯 ちやうちん を、此方 こなた へ取 と ると、忘 わす れたやう
に、黙 だま つて放 はな して、何 なん としたか、一 しよ 所に も 持 も つて居 ゐ た
海水 かいすゐ 帽 ぼう さへ、八 やち タと雨 あめ の中 なか へ落 おと したのである。

「何 ど うせ内 うち へ行 い つて絞 しほ るんですもの、貴 あなた 方が き 着 き て
おいでなさいな。」

尚 な ほものも云 い はないで、イ たゞ んで空 そら を仰 あふ いで居 ゐ た。

お静しづは何なんの氣きも着つかず、

「何どうしたんです、だらしがないわねえ、ヨ」

といふ大人おとなびた、快活くわいくわつな、老實まめやかな、其その癖焦くせじれ

つたさうな懸聲かけこゑで、腰こしを雨溜あめだまりの地ちに低ひくうして、やが

て、片端かたはしを取とつて其その半なかばを引揚引きあげながら、

「紐ひもが泥どろだらけぢやありませんか。」

と何心なにこころなくフと提灯ちやうちんの灯ひに透すかすと、帽子ぼうしの下したに

伏ふせられて、右行うぎやうせず且かつ左行さぎやうせず、濡色ぬれいろの美うつくしい

蟹かにが一個ひとつ。

「おゝ。」と背後うしろへしさりざまに、お静しづは反そ

やうにして衝つと立たつ。

恚かうと期きして威おどしてさへ、其その恐おそれ方かたに、驚おどろくや

う馴ならされた數夫かずをは、これにハツとして、心付こころづいて

面おもてを合あはせる、二人ふたりの中なかを、蟹かには其その鐵小實てつこざねの脛當すねあてを

サソクに横よこに引ひいて暗くらい方ほうへ颯さつと隠かくれた。

惟おもふにこれは、恚かる雨夜あまよを、しのび歩行あきの葉武はむし

者であらう。

一體彼の觀世音の御堂の下なる古椿が、些細小川に根を洗はれて、土の中に黒く朽目を顯した洞の中に、鎧の袖を揺り合せて、二ツ、三ツ、時に四ツばかり、待伏をするのは斥候で、それより前途、月ヶ岡の方まで、まだ先鋒を進めぬけれども、下の方、五丁躰へ斷續して、五騎、七騎、此處彼處、地の窪める處、水の淺き處、轡を揃へて、陣を張る。此の單陣は縦横の陣に次いで、一陣は町の方へ、一陣は海の方へ、末廣がりに數を増して、五里、三里、七里にはびこる大網颯と打つたる如く、然も軍勢手戈を揃へて、其の數、網の目よりも多く、秋草、(山名)池子(山名)を捲き落す秋の木の葉に異ならず。萌黄、緋緘、雜鎧、黒草緘着たるもあり、鋭き兩股の方天戟を中天に振つて、八足の進退自在なるが、いづれも其丈五寸に満たず、小さは山蟻に如かずと雖も、蛇を斬り、蛙を追ひ、百足を殺し、毛蟲を打つ。時には寺の厨を襲うて古猫を驚かし、軒下をおびやかして別莊の門に犬を馳らす。出沒の極まりなきや、架を渡り、井戸に潜み、石に化し、砂に化

し、水に化し、寸隙を潜るかとするれば、大廣間に駈けて出る。

渠等は、恚くして水を奪ひ、渠等は恚くして陸を奪ひ、山を領し、川を領し、樹を擽にし、草を従へ、年々侵略の域を開いて、果は何をするか分らない。

けれども人はこれを恐れぬのである。學生も恐れなければ、婦女子も恐れず、お静も亦はじめは敢てこれを恐れては居なかつたので。

未だ松蟲の聲を聞かない前、黄昏の濱邊の地引を見ようと、數夫と連立つて月ヶ岡を出で、椿を横ぎり、觀世音を拝み、此の小屋の前を通つて、瓦焼く竈を横に折れると、池子、秋草、右左、五丁畷から遙に見ゆる延命寺の石碑について、小橋を渡ると、鎮守の松の森の下は、ハヤ潮風が身に染むばかり。海へ行くのは、停車場の前を横ぎつて、兩側別荘の間を抜け、葭蘆の繁き小川の橋を、最う一つ渡るので、それからの路しばらくは、夜は松蟲の名所となる。・・・丁ど其の砂地であつた。

お静しづが蒼白あをじろいと語かたつた海濱かいひんの西洋館せいやうくわんの土塀どべいの際きはか
ら、其その爪先つまさきを横切よこぎつたのは、一騎き、花はなやかに鎧よろう
たる緋織ひをどしの若武者わかむしやにて。

初陣なるべし、其の紅蟹、戦に馴れずと覺しく、
 （まあ、美しい、）と言ふあどけない聲の下に、
 はらりと手巾で壓へられた。

直ぐにお静は、其の時自分が翳し持つて、夕陽の
 名残を遮つて居た、手なる海浴の帽を取つて、裏が
 へしにすると、若き敵將の囚を入れて、其まゝ手巾
 を蔽にして、兩手で舁きながら、嬉しさうに、俯向
 き見つゝ。

濱へ出ると、數夫は最初から憊る他愛のない道草
 に與せず、先達て早や波打際に影を長く、背姿でイ
 んで、傍に近き地曳網、都人の一團立集ふ前後に、
 見えつ、隠れつ、幼子がさきに、婦人が次に、壮佼
 が殿し、脊の高い親仁も交つて、曳哉！ 曳哉！
 沖の小島に足を踏張り、暮れ行く空の秋草山に枕す
 るかの姿して、後退りに曳くかと思れば、呼吸をも
 つかず、すた／＼と、入亂れながら足を揃へ、誰彼
 の鍵繩兩方より、一イニウ三イ四ウ入違ひに、綾と
 り、投かけ、引からめて、綱も弛めず働く状を、餘

念^んなげに視^{なが}めて居^ゐた。

人目^{ひとめ}繁^{しげ}ければ傍^{そば}には寄^よらずに、お静^{しづ}は隔^{へだ}たつて後^{あと}なる方^{かた}、件^{くだん}の西洋館^{せいやうくわん}の塀^{へい}外^{そと}に、持舟^{もちぶね}と見^みえて引揚^{ひきあ}げてあつた、白塗^{しろぬり}の端艇^{ポオト}の舳^{へさき}に腰^{こし}を休^{やす}めて、數夫^{かずを}の姿^{すがた}と、地引^{ぢびき}の状^{さま}、打寄^{うちよ}する浪^{なみ}、かへる浪^{なみ}、岬^{みさき}を漕^こぐ船^{ふね}、沖^{おき}の雲^{くも}、晝^{ひる}を見^みるやうに視^{なが}めて居^ゐたが、内證^{ないしよ}の樂^{たのしみ}をといふ顔色^{かほつき}、手巾^{はんけち}の端^{はし}を擡^{もた}げて、一人中^{ひとりなか}を差視^{さしのぞ}くと、むく／＼と爪^{つめ}を上げ^あげた。

遁^{のが}してなるかといふ風^{ふう}して、下^{した}へ丁^{とん}と引^ひくとずるり^{はひ}と入^{はい}る、覗^{のぞ}けば、乗^のり出^だすので、又^{また}振^ふり下^{おろ}すと、入^{はい}るのを、窺^{うかが}ふと、のツさり這^はひ上^ある。

(えゝ憎^{にく}らしい。) と箕^みを振^ふるやうに、邪^{じや}険^{けん}に、ばさ／＼と揺^ゆり落^おして、其^{その}まゝ、小走^{こばしり}に駈^かけ出^だした、波^{なみ}打^{うち}際^{ぎは}で呼^い吸^きを切^きつて、

(數夫^{かずを}さん、些^{ちつ}ともいふことを聞^きかないんだもの。打^{うち}棄^ちつてやれ、畜^{ちく}生^{せい}!) と、突^{いき}然^{なり}逆^{さか}に取^とつて帽^{ぼう}を返^{かへ}すと、紅^{べに}蟹^{がに}は、しばらく鰐^{つば}の端^{はし}に留^{とま}つたが、熟^{じゆく}柿^しのやうにほたりと落^おちた。

其のまゝに遁げ去らず、爪を上げて向かつたので、お静は丁ど筒を抜いて銀煙管を取つた居た、雁首にかけて向うへ飛ばすと、はずみに二つばかり、ころ／＼と轉けた處へ、波がしらがざぶりと來た。白泡のなかに、其の一片の紅、翻へつて隠れたが、ざつと巻いて返るとゝもに、一際色濃く甲を見せて、忽ち、兩爪を上げて、じりゝとお静に差向けると、此方もつか／＼と前へ進んで、
(生意氣な、) と再び海面へ撥ね飛ばす、見事に轉げたが遠くは去らず、又浪の口が銜へたけれども、砂にハツの足を残して、二たび方天戟を構へたのである。

三たび目の時は、疾や海の色薄墨を染めたる如く、地曳も黒い影になつて、忙しく燈籠の晝の廻るやう、白く堆き浪打際で、しばらく蟹を見詰たが、急に弱々しくなつて、黙つて見て居る數夫の背中へ、袖屏風して身をかくして震へて救ひを求めたのである。お静はこれあるがために、いたく同類の戦士が、復讐を恐れるやうになつたので。

さればやがて、自分が嘗てなつかしさの思ひに煩

ひ、檜物町の抱主さへ、憐んで年を負け、朋輩の手
前は落人にして寄越してくれた、數夫と分れねばな
らないやうになつたのも、お静は、一度、蟹の怨
みゆゑぞと思つたのであつた。

「詰らないことをいふもんぢやない、そりや一寸の蟲にも五分の魂、酷い目に逢はせれば、小さな蟲だつて腹を立てます。近頃聞きや螢の彼の美しい光が、つかまへると、最う一倍明くなつて見えるのも、腹を立てたつて言ふぢやないか。

先刻お前が捕へようといつて大騒ぎをした松蟲も、あんな優しい、可愛い蟲だけれど、籠へ入れられて鬚を動かす時は、怒つてるのかも分らない。人間にはそれこそ向つたつてかなはないが、蟲同士、魚同士、鳥同士ぢや、喧嘩もしたり戦もしたりさ、人が思ふやうに、一概に蟲けらとばかりいふやうなものぢやないよ。

それだもの、それ相應に手手手が自分の身を守る道具を情へて居て、身體が大切さには、手向ひをしようけれども、そりや最うほんの其の當座ばかりのことで、一寸と遠退きや、其切、何が何だか分るものかね。親子も兄弟もないのを見たツて知れたこと、怨を残すの、崇をするのツてことは決して無い

んです。

お前は何か、私が唐突に四五年別れるつもりで、奮發をして、餘所へ行くといひ出したのを、蟹の思ひだの、今夜の空模様と同一で、氣が變つたのといふけれど、何の今更當世らしい、心變だの、浮氣だなんて、そんな暢氣らしい事があるものか。

思ひだの祟だのといふよりも、却つて彼の蟹は、私を教へてくれた恩人だと思ふ。いゝえ、蟹よりはお前が善智識だと思ふんです。

先刻、あゝやつて、二度も三度も煙管で引掛けて撥飛ばすなんて、亂暴なことをして、あとで恐がつて震へるから、何故そんな邪険なことをすると云つて聞いた時、靜さん。

いひかけて、石垣の上なる、觀世音の御堂の縁に腰をかけた、數夫は、傍に差うつ向き、喫まうともせず煙管を持った手を膝に置いて居る、お靜の方に向直つて、

「お前、何といった、東京から來て月ヶ岡へ一所

になつてからは、張も意地もなくなつて、ちやき／＼の江戸ツ兒だのに、餘り自分でも筋が抜けたやうだから、と云つたらう。

「どんなに胸へこたへたと思ふ、何！ 張と意地、男は猶更の事だと、思つて、お前は恐くなつて震へたけれど、私はぞつとするほど身に染みたよ。」
と語るだに今もおのづから、數夫は肅然として身を緊むる。

お静は顔を上げたが、

「氣に障つたら堪忍して下さいな、あなた大丈夫、これから屹と氣をつけて、あんな邪険らしいことはしませんから。いゝえ、屹とまた我まゝな氣でも出して、お父さんやお母さんに、粗相でもしてはと思ふんでせう。私は最久しく煩つてから、ほんたうですよ、自分でも生れかはつたやうに氣が弱くなつて、踊の稽古を仕込むたツて、下地ツ子を叱る元氣もなくなつて居たんですもの。」

何もあなたへお勤めに、音無しくして居るんぢやないんです。前なら、あんな厭な奴、御祝儀に水引

をかけて、御紋着で畏つたツて、口も利くんぢやないけれど、最う堅氣だと思ひますから、お隣の髯だつて、内へ来りや大事にするし、奥さんにだつて、此方から機嫌を取るやうにして居るぢやありませんか。此間ツからの約束ですから、私やこれから歸つて、お飯が濟んだら、八幡様の屋臺へ行つて、あの若い衆に、曾我が顔を拵へて上げるつもりですよ、あなた。」

屹と云つたが、打菱れて、

「私や何うしてそんな氣になつたんです。」と
愁然として頰を垂れた。

聲を強うして、

「何うだらう、まあ、澤庵に握飯さ。ばら／＼蚤が跳ぶ樂屋へ入つて、改良劍舞だか源氏節だか、こんな片田舎のお茶番の後見でもしようといふ氣に、何うしてなつたんだか、御存じ？」と又膽つた目の裡に、怨あり、涙あり、しかもいふいべからざる位があつた。

故あるかな、涼傘さして當流の大師匠ながしが、横町の舞臺へ通ふ、夕暮の其の七ツ八ツの頃ほひより、踊には天稟の妙を得て、年紀十七の時疾く流儀の免許を得た。岩井靜馬といふ名を其のまゝ、お酌の時から押通して、いかなる座敷を勤むるにも、唯紅燈に蝶の影、緑酒に花の姿のみ、一度も三絃を手に取らなかつたのであるけれども、檜物町の檢番の札、長く三番の下に落ちず、就中、名題「深山櫻及兼樹振、」保名の物狂ひに神を會して、紺泥に

銀で秋草の亂れ咲を畫いたる舞扇、衝と疊について
片膝を立つる時は、席にあるもの襟を正して、地に
立つたるは、いかなる上手も、音々に汗を握りしと
かや。

からかひ半分土地のもの、客までも聞覚えて、お
師匠さん／＼と渾名に呼んだのが誠となり、同一桔
梗家の暖簾下なる、下地子、お酌どもが、姐さん、
おさらひをと言ふのが最初で、五人七人弟子が殖え
ると、花は姿、蝶は影、翠帳に宿らず、紅閨に留ま
らず、堅いが評判であつたから、お店の内儀たちが
鼻肩にしたので、町家の娘も次第に加はり、扇子を
胸に裾短な、お洒落な涼傘連、朝は一四ツ五ツ打續
いて、横町の露地から桔梗家の裏木戸を開け、お師
匠さん今日は。母屋から中庭一ツ、お静が居間は離
座敷、暖簾を飾らうとて、抱主が別扱ひで、戸外へ
は出さず堀の内へ、別に岩井靜馬とし、御神燈を提
げさせてあつた。

此の座敷で煩らひついて、氷嚢に括り枕、紫陽花
の影次第に薄く、風鈴の風に弱々と呼吸こそ通へ、

やがて石燈籠いしどうろうに月の影かげさして、蟋蟀きりぎりすの鳴なく頃はと、
醫者いしやも頭かづへを傾かたむけた時とき、抱主かへぬしの姐ねえさんが、人ひとを遠とほざけ
て、膝ひざに抱だいて、誰だれも居あないから親おやだと思おもつて、胸むね
にあることを聞きかしておくれ。

随ずいぶん分ぶん身しん上じやうのためになつて、小ちひさいが藏くらも立たてたお
前まへのこと、思おもひ切きつて相談さうだんしようと、こゝではじめ
て知しつて、おや／＼、姿すがたもいつか亂髪みだれがみと云いふのかい、
今いま時とき古風こふうな何なんのことつた、しかも去年きよねん372の櫻時さくらちき
から、然さう、そして此頃このころは旅たびの空そらで、そんなら、お
前まへも追おつかけて草くさを敷し寝ねにするが可いい。江えの島しまへも
行いつたもの、裏木戸うちきとは自由じいゆうなり、新橋しんばしは直ぢき其處そこだ
し、遁にげ出だしても濟すむものを、意地いぢも張はりもありなが
ら、年ねん期きがあるから義理ぎりが悪わるいと、それほど主人しゅじんを
思おもふなら、何故なぜ打明うちあけて云いつてはくれぬ。唄うたの文句もんく
はいゝけれど、眞個ほんとにそんなやうすでは、氣きでもふ
れたら何どうおしだ。こがれ死じをさせるまでも、お前まへ
のからだで儲まうけるやうな、情無なさけない私わたしだと、思おもはれた
のが怨うちめしい、これだつて江戸えどッ兒こだ。したが他ほかの
ものゝ手前てまへがある、私わたしが支度したくを手傳てつたふから、氣きの向む
いた時とき、何時いつでも可いいから、そこを明あけて遁にげてお

くれ。但し土産も小使も、目立たぬやうに持たして
上げる。やがて龍口寺様のお會式に參詣る次手、内
證で寄つて顔を見ようが、女世帯なり、抱妓は大勢、
もしか、内があけられぬと、これでしばらく逢はれ
まい。久しくお前の踊も見ぬ。静ちゃん一ツお名残
に、おはこの保名を立たないか。――葉種の畑
に狂ふ蝶、翼交して羨しいねえ。

直ぐに枕を上げたので、・・・
實や數夫とは二世の縁、幼い時から、伯父さん伯
母さんと、お靜が馴染んで遊びに行つた、鄰近指物
屋の名人がある、其が數夫の縁續きで、二階に下宿
して居たゞけだつたに。

元來、數夫は、月岡正左衛門、老夫婦の實子ではないのである。

其の月ヶ岡の鄰村、沼田の豪農、鳴崎なにがしの二男で、世にいふ四十二の二ツ兒であつた。

物語にも此のことあり、一たび棄てゝ人に拾はせ、やかて取戻せば不忌といふ、相生寺の隱居、其の頃は未だ當住であつた、説に従ひ、さて棄兒にするのに右から左、譬ひ儀式にせよ、捨ひ人が昨日祝を持つて來た村内の者ではをかし、土地は狭いこと、殊に大百姓、雛鶴も一聲や、瓜番の小屋の親仁まで、初産の屋根を仰いだれば、とわざ／＼鄰村まで親仁どのが抱いて出かけ、去ぬる丙羊の年。二百十日の大あれで、方丈を吹き飛ばし、本堂も損じたが、未だ其の頃は堂守が居た、此の月ヶ岡の觀世音の縁に据ゑて、式の如く小隠れると、此處へ、嬰兒を亡くして泣きに來たのが、これも小村ながら月ヶ岡の長

者と呼ばれた、正左衛門の女房で。

一目見るより、わあ！活返つたと半狂亂、すぐに抱き取つて引返す、石段を下までは下させず、もしノノと父親が呼び留め、坂の途中で早や取返さうとすると、頭を振つて肯ぜず、喧嘩をすれば、袖の珠の碎けん恐れに、已むを得ず婦人の云ふがまゝに、あとについて、兎も角、其の住居。

まだ新家を設けぬ時分、秋草山の麓なる、丘の上に、一軒家ながら大横で、（近頃は駒田が住居）
慇懃なる接待あり。

返せ戻さぬと、女房と、棄子の親。涙出づるまで争つた三鼎、正左衛門眞中にどツかと坐し、目を瞑つて是非がござらぬ、コレヨ、尋常にお返し申せ。さりながら今度を御縁に以來は御懇に頼み存ずる。仰せにや及ぶべき、御許に差置く分には命の親。一お拾ひ下されし御内儀は、悴のためには命の親。一旦棄てたものなれば、固より手前どもの息子ではなし、正左衛門殿、御夫婦より更めて和子様頂戴いた

すと、子の可愛さは知つた同士。父親も心を察して、泣く／＼取戻して歸つたが、縁なれば、正左衛門を、名づけ親に頼んだので、子寶多く設けたらば、養子にくれる事もあらうと、心に念じて數夫とつけた。

實の母は、敢て其の四十二の云々に心づかひをし、たと言ふでもないが、産後の肥立捗々しからず、殊に乳の出が薄かつた。

七夜の祝に月ヶ岡から夫婦來合せ、此の由を聞く、と手を拍つて、憚り多いが、もつけの幸ひ、此方は年を取つてからの初産なり、親の身さへ憂慮なりしに、肥立は固より、乳の道もよくついて、背戸へ棄つるか流るゝばかり、世帯は鎌倉なる雪の下に、若後家を立てゝ居る、妹に打まかせて、お乳母になりと上りたいと、胸を壓して歎いたので、數夫の兩親、顔を見合せ、貰ひ涙にくれたのが、屏風の内外で、打合せて、然らば預け參らすべし。

夫婦は恰も夢心地、田圃道を交る／＼、手から手へ抱いて歸つた。

やがて母も本復したが、其まゝ連れ戻すも氣の毒らしく、日が経ち月が経ち、年がゝはつて、つい五才の春まで過ぎた。固より其の間、風なく、雨なく、おだやかなる日さへあれば、缺かさず抱いて来て顔を見せもし、三日に上げず見にも行く。近い里に遣つた風で過ぎたのであるが、さてあるべきにあらざれば、再び數夫は實家に歸つた。

三年過ぎて妹が一人出來た。和子二人切の時はともかくも、お三方あれば數夫をと、名も呼捨てにするくらゐ、我兒を取戻す劍幕で、夫婦再三出向いたけれども、鳴澤にてはうべなはず、斷つてと強ふる力もなく、其まゝ再び泣寝入。

たゞ沼田村の空ばかり、二度目の種痘をする時も、醫者の手を引張つて、正衛が自分に出かけたのである。

五年目に又一人末の弟が出来た、數夫が十三の時であつた。

此度は退ツ引させず、此方も最早や情に迫つて斷り切れなくなつたのであるが、其でも未練のあつたのは可愛いのばかりでない、此の數夫、うまれつき、美人の聞えの高かつた母親に肖て、なほそれより、蒲容柳質の小公子、所謂身替にならざる首、三太長松の亞流でない。

嘗て棄てられたのが月ヶ岡で、觀世音にあやかつたと、人も口々にいつた。目に品あり、道を行く人の親も、振返つて見るばかり。同一年紀頃の腕白ども、東土産の錦繪は、汚さぬことゝ合點して、綺麗なものを損なはず、蟲が飛んでも楯になつて、皆が數夫を庇つたので。

兩親が惜むほど、堪へ難き思ひのなほ募るは、月ヶ岡の長者夫婦、果は相生寺へ日通ひをして、隱居

和尚わしやうに泣なきしみづくと、後のちに荒物屋あらものやの亭主ていしゆになつて、焼酎せうちゆうを賣うらうといふ、頓生屋とんしやうや菩提兵衛ぼだいべゐとも云いつ、いへき變かはりもの。らつきようの様な坊主ばうず首くびを賭かけものにして、下腹したはらへぐつと飲のみ込み、巻まり手に數珠じゆずをかけて、元氣げんきは可いいが御老體ごらうたい、よぼ／＼と下山げさんあり。

鳴澤しぎさはの奥おくの間に、金銀鏤きんぎんちりばめたる伽藍がらんのやうな佛壇ぶつだんを背負しよつて、聞説きくならく昔むかしは天竺てんちくにと、故事ふるごとやら、引事ことやら、方便ほうへんの大嘘おほうそやら。會者定離あしやぢやうりの因縁いんねんを説といて、前世ぜんせいの約束やくそくとあきらめさせ、漸おそく兩親りやうしんを納得なうとくさせた。

これより前さき、數夫かずをは物心ものこころを覺おぼえてからも、月つきヶ岡をかで月つきの内うちの半なかば以上いじやうを寐泊ねとまりして、藁わらの上うへより育てられた長者ちやうじやの家に馴なれ睦むつみ、我わが燼まも餘計よけいに謂いつて、仔細しさいを知らぬ人ひとの目めには、却かへつて月つきヶ岡をかの兒このやうな、そればかりを、實じつの親おやは飽あかず思おもふ位くらゐであつたが、膝許ひざもとに引寄ひきよせて、あらためて養子やうしにする由言よしひ含ふくめると、然さばかり馴染なじんだやうに思おもはれたのも、唯遠慮たゞゑんりよのない、甘あまやかす、餘所よその叔母おとこさんに過すぎなかつたものと見みえ、固もとよりものゝ道理だうりは分わかるし、大人おと人なしやかな幼兒をさなことて、冠かぶりを振ふることはしなかつたが、

悄然とした心の裡、數夫は、兩親に棄てられたやうに思つたのであらう。

いよ／＼月岡の姓を名乗ると、老夫婦のいつくしみは、一人兒の上に、なほ、強ひて移し植ゑた若木の橋、御領主の御祕藏を拝領なんどしたるやう、乳母が主人に事ふるばかり。

然るにても、人の子の、實の親の懐しさに、道のり一里とは隔たらず、花も同じ時、月も同じ時軒端にかゝる片時雨も、棟を分たぬばかりだけれど、二日見ねば堪へられず、沼田の沼に釣すといひ、池子に小鳥を狩るといひ、椿が咲いたと、枚ながら、瓜が生つた、と蔓ながら、袂に添へ、手籠に提げて、鳴澤の家に音信るゝを、唯道すがらを案ずるのみ、蝮にさゝれな、漆にかぶれな、勿濡れそと思ふ露ばかりも、養家の夫婦に僻む氣はなかつたけれども、さあ、恚うなると實の母、男勝りの義理正しく、襷を取つて袖に抱かず、もつれ毛を拂つて頬ずりせず、使に來たのか、宜しくよと、果ては門から歸さるゝ。

幼馴染の柳に泣き、垣に取付き、松に縋り、しよ
んぼりと裏の藪にイむことさへ度々あつた、一時秋
の日疾く暮れた、養家へ歸る田圃道、黍殻に月の射
す中を、後へ三足、前に二足、我にもあらず辿つた
が、餘りのことに世を果敢なみ、十三の幼心、今は
慙うと思ひけん、途中から小川を涉り、樹立を抜け、
池子の山路をとぼ／＼と、萩薄、遠近の蟲の聲に誘
はれて、やがて山深み梟の一ツ鳴いたる森の中、切
立の岩の形、朦朧とあるを知邊に、小さき拳ほと／
＼と、美童相生寺の門を敲く。

火焰山

二十九

やがて大學孟子など、數夫は今もよく書く手習の草紙の師、件の隱居の膝に縋つて、其の媒妁を怨みながら、世に恩愛の悲しきこと、慈悲の情の辛きこと、苦痛、鬼神の責苦に過ぎたり、浮世を思ひ切りました、養家への義理も立つ、實の親の戀しさも些とは忘れられませう。新發意に遊ばしてお寺に置いて下さりまして、一心に伏拝むと、頓生屋の菩提兵衛齒のない大口を開いて呵々と打笑ひ、馬鹿野郎、山へ入つて坊主になるより水あがきして河童になれ。重ねてそんな不料簡を出すと、十人百人に珍しい結構な身を棄て、出家沙門にならうと申す、因果なものはこの兒でございと、延命寺のお開帳に、見世ものに叩き出すと、天窓から大喝したが。

寺男をつけて養家へ返して、しかし世が世なら弟子にして、天下の名僧にしようものを、と寺を譲つた住職に語つて、默然として欺息し、かまへて人に

洩らす可からず、可祕可祕、とあつて法衣の袖を搔合せた。

日ならず、またよぼ／＼と下山あり、養家の父を實家に招いて膝組の内談、喃、それが可からう、可うござりませう、いかにもと事一決。

東京へ出ずに極まると、恰も可し、養家の母の妹が縁着いた先方、今は亡き夫の弟、日本橋檜物町に指物屋を営み、職人ながら屹とした暮と、數夫を託する次第になつたのであつた。

村で尋常科を卒へるとゝもに、高等科は上京して、常盤とやらむ小學校、土地ツ兒も同じで、數夫は二十三の去年まで。

靜馬が抱へられた桔梗屋とは、鄰町ながら、背中合せ、指物屋の水口と、踊子達が涼傘を疊む、お師匠さんの裏木戸とは、彼の狭い露地一つ。手拭を伸しても、縁の結ばるくらゐな中、悉は略之。

此間絶えず一月に二度、二月に三度など、養父母へ顔を見せに、歸るのが身の勤め、やがて志すことをなし送けて、二人を東京に迎ふるまでも、田舎に住み葉てようとは思はなかつた數夫が、去年の夏から、突然都門を辭し去つて、長く相州の僻地に埋れ木にならうとしたのには、別に仔細のあつた事で。

こゝに數夫に兄がある。兄弟四人の惣領で、名は正三郎、氣性數夫とはがらりと違ひ、幼い時より書を讀まず、字を習はず、博突を好み、相撲に耽り、長ずるに従つて、海道筋に名の聞えた、沼田の正とて大兄哥。

然も豪家に生れたれば、鋭きながらも鷹揚で、金づかひ綺麗に氣位高く、酒とは寐ても、婦人を抱かず、強きを挫いて弱きを助くる、所謂江戸の侠客の概あり。

思へらく、一石の米幾粒ぞ、田地千石を耕して、我天下に何をかなすと。

すなは 即ち林を伐つて柱となし、山を崩して庭となし、
はたけ 畠を賣つて塀を築き、田を棄て、屋を起し、蒸氣器
い 械を鐵道で驚掴みに引寄せて、二棟の製絲場、煙突
たか 高く天に沖して、池子の頂に黒煙を立てたるが、使
ふものにはいふも更なり、繭を買ふにも、絲を賣る
にも、我がためよかれとばかりはせず、其の俠氣が
さき 先に立てば、然せる社會に立交つて、損多く徳少な
く、家産稍傾きたる上、二年續けて二度の失火、人
には微傷もなかりしのみ、繭も、絲も、工場も、次
なる炎に母屋さへ、唯一掴の燼となんぬ。

しや 這般！ 火に負ければこそ焼けもすれ、おのれ一
ばんしやうあにい 番正兄哥が、雲をも凌ぐ炎の山を、掌に握つて見せ
うと、此の思ひつきが突飛であつた。

かつ 嘗て、繭玉の買出しに、信濃のあたりを經めぐつ
て、小田原合羽に切草鞋、一文字の笠、脚絆がけ、
けつき 血氣に路を貪つて、うら枯の頃なりし、焼野が原を
とほ 通りし事あり。

な 名にし負ふ淺間の山、野末に黒き衾をかけて、迦
づち 俱士の神の閨、物凄まじくも寂として、煙も立たぬ
ゆふ 夕まぐれ。

焼石は左右に崩れ、焼灰深く凹んだ中を、唯見ると黄なる流があつたが、硫黄の匂芬々として、面を打つに心付いて、袂なる早附木を探り、試に點じて衝と落すと、水の中に消ゆるが如く、二度ばかり音がしたと思ふと、ブス／＼といふ響き。

いかさま燃ゆるでえず、と片頬笑して、平氣で一飛に躍越して、其まゝ行過ぎようとしたが、心得ず背がほてるに、振返つて見ると這は什麼。

早や五六町さきなる方に、ひら／＼と炎立つたり、とかういふ間もあらばこそ、いきなり笠を取つて投げ、小田原合羽をかなぐり脱いで、暴風に芭蕉の揉まるゝばかり、十里渺々として一草一木なき、焼野ケ原の只中に、身を翻して働いたが、一打燼消すごとに一間さきへ燃え上つて、ちよろ／＼と這ひ進むに、茫然として立つて見れば、目も遙に、薄く紫の煙湧き出でゝ、藍よりも蒼き炎、暮れ行く空の雲深く、淺間を包んで舞ひ下り、野中に颯と擴がる中へ、

果しもあらず燃え込んだ、あまりの物の凄じさに、
正三郎は空恐しく、我を忘れて、ヒヨイと飛ぶと、
踵をめぐらし、里ある方へ一目散。

此處もハヤ火の粉の中かと、膽を冷したが、宿は
事なく、小雨が寂しく降つて居た。お泊りなさいま
し、おつかれ様で、と出女に袖を引かれながら、正
三郎、淺間の方を振返つて、氣抜きのしたやうにイ
む處へ、旅の者三五人、打連れてどや／＼と、酷い
火だ、大變だ、三途の川より恐しいと、口々に行過
ぐる。

ともかくも旅籠を取つたが、好きな酒も咽喉へ通ら
ず、姐や飯にする、と箸を取つた、平の蓋も開けた
まゝで膳を突きだし、ごろりと横になると、次の室へ
今着いたのが、立ちながら野火の風説。

村方に損じもあらば、名乗つて出ようと疲れて寐
た。其の火、なにがしの里の人口で、村の者が總出
で留めて、幸ひ一本の松をも害せず、但、野の斜め
に燃ゆること、一晝夜、約三里。

人に損はかけねえから、其のまゝで黙つたが、恐らくは天の罰か、一體それから思ひついて、硫黄の採掘にかゝつたのが、間違であつたも知れず、北海道で引請けたのが、死山でまるで。

工場は二度の火災なり、のツても反つても最う叶はぬ、御両親もお年紀の上、今度ばかりは愚癡をおつしやる、男でなくば死ぬものを、腹を切つても腑甲斐はない。資本さへ都合が出来ると、最う一度穿つて見る、活山一ツ別なるは、己が身を憐んで、然る工學士の先生が見込みをつけて下さつた、自分も手心覺えたり、間違ひは無えが、金子だてな。

外に工面のつけやうなし、月ヶ岡へも今までに汝にかくして度々の借用、己の口から最う云はれぬ、弟、一生の願だ、き様から頼んでくれと、指物屋の二階にたづねて、面瘦のした正三郎が數夫の優しい手を取つて、押頂いて言つたので。

一議に及ばず、歸つて月ヶ岡へ由を語ると、顔を見て嬉しげに、何うしてやつても他人あつかひ、裕

一枚ねだらぬを、怨めしいと思つたに、よく金子を貸せと言つてくれたと、涙を流して喜んだが、しかしそれがために田地を賣つた、奉公人にも暇を出して、老夫婦が世を侘しい、さしむかひの住居となる。

然までとは思はなかつた數夫はこれに驚いて、死もなほ足らずと詫び入ると、いや粥を啜つても大事ないが、願がある、聞いてくれ。朝夕お前の顔を見て、せめて半年居て死たいと、膝と背に取縫られ、我を忘れて泣き伏したが、直ちに下宿を引拂つて、月ヶ岡へ歸つたので、夫婦の喜び一方ならず、舊家は人に貸し、東京風の別荘づくり、三間ばかりな新家を建て、やがて親子が引移つた。寥しく嬉しく懐しく、秋春をこゝに暮らして、數夫は月も見ず、花も見ず、唯都の空を見る時は、池子の山の蜀魂、血を吐く思ひはおんなじで、靜馬のお靜があるにもあられず、枕についたが、抱へ主の情に因つて、一所に成つたのであるものを。

「否、それはよく分つて居る、鐵拐な口も利くけれど、優しいのは知つて居るんです。先刻も濱から歸りがけに、松蟲の音を聞いて、お前が暫時聞惚れて居て、眞個に優しい聲だ、意地はなくツても婦人は大事ないと云つたつけ。何、私は、お前が蟲の聲より優しいのを知つてるよ。」

またそれを知らないで、いつもいふ通りあの大切な年寄つた二方を、預けて行くことが出来るものか。最う阿父さんや阿母さんは、私にも見かへるほど、お前が氣に入つたやうすだし、串戯でも口へまで出してお云ひだから、お前さへ、優しく留守をしてくれれば、遁れられない義理はあるが、構はずしばらく居なくつても可からうと思ふから、打明けて頼むんだがね。

恚ういふと、大層奮發氣があつて、立派な男のや

うに聞えるけれど、それも、皆お前のお庇さ。

何うしてこれが、前であつて御覽なさい。よしんばお前に働きがない、些と稼ぎにでも出かけなさいと、突出されても意氣地やない、ぼんやり坐つて居る情ない人なんです。

殊にお前が探切に、こんな者でも見棄てないで、一所になつてくれたから、親達の義理ばかりで、引込んで居る時のやうな、唯寂しい氣ぢやない。お前も身體が強くはなし、いつまでも田舎に暮さうといふものだから、金輪際、世の中に出ようなどと、氣は揉むまい。出家でもしたつもりで、果敢ないながら、心易く、此の月ヶ岡で暮さうと、一旦心を極めたんだ。

そりや私だつて何だから、随分、願も望みもあつた、大なことは望めないでも、せめて此の村から數といふものが出たと、人にも知らせたし、自分の名は出さないでも、村の名、親の名を知らせたい位なことは忘れないで居たんだが、一年なり、半年なり、此の烈しい世の中で、學枚にはおくれるし、友達に

は忘れられる、あとの者には追ひ越されるといふ譯だから、氣も滅入つて、もう何うなるものかと思つた處。

丁どお前が尋ねてくれて、あの地藏様の前であつた日さ。

相生寺の山門の邊を、ぼんやり歩いて歸つて來ると、路傍の崖に木槿とね、それから早咲の萩が咲いて居て、餘り綺麗だから、一枝折つて、それから歸りがけに、兩側が藪で、それに榎の太木が岸におツ冠さつて、薄暗い中を、沼田の沼から流れて來る、小川が通つて、丸木橋が懸つて居る處があるがね。

流の些と深い處へ盥を浮かして、竹で漕いで遊んで居た、九ツばかりの色の白い、くりツと肥つた、腕白さうなのが丸裸さ。

田舎ぢや珍しくもないことだから、それに心は留めなかつたけれど、あゝ、此の橋を渡つて、月夜にお山へ行つて、坊さんにならうと思つたこともあつたつけ、と流の源もなつかしいし、石を拂つて腰を

かけてさ、手帳があつたから、描くともなしに其處の景色を鉛筆のさきで引いて居ると、盥に乗つて居た腕白が、ざぷ／＼と泳いで来て、ひよいとお前、橋へ上ると傍へ来て、恚う、膝に手を構へて及腰になつて覗くんです。

人肌がするほど傍へは来ず、ものも云はないで、目を圓くして澄めて居たが、やがてもう止さうとすると、をぢさん上手え喃　ツて、お前、其の繪をくれると言ふんだ。

小兒にだつてやれるんぢやない。其よりも之を上げようかと、萩の花を見せるとね、何、そんなものはいくらでも家に咲いてると、然ういふから、何處だと聞くと驚いた、道で折つたのが其の小兒の内のだつたが。あゝ、然うか、悪いことをした、堪忍しなつてあやまると、そればかり構やしない。内には澤山花が咲く、大な椿あつたけれど其は暴風雨に吹折られた、まだ、牡丹櫻の綺麗な樹がある、それが濟むと霧島つゝじといふのが咲くし、菖蒲もある、桔梗もある、最う些と經つと菊が咲く、それからお

腹なかの痛いたむ時ときお粥かゆに入いれて煮にて食たいべると、直ぢきに治なほる
花はなもあると、話はなしながら、又また、ぼちや／＼と水みづを分わ
けて、盥たらひへ入はひると、背うしろむきになつたがね。」

「静さんい お前がこれだけ聞いても、そこいらを驚のやうな聲を出して、ぎやあ／＼駈け廻つてる近所の百姓の小兒とは、宛然腹が違つた伶俐なものだと思ふだらう。」

力味があつて、可愛くツて、人見知をしないで、ぞんざいでない、そしてね、其の目の品の可さつたら、氣の所爲か、口を利くのに訛も少なくて、聲さへが清しい。私は神童、何、人間並すぐれた住い兒だと思つたよ。

左様ならと、分れて歸る路々、氣恥しいやうでもあり、懐しいやうでもあり、頼母しいやうにも思つて、先づ此の月ヶ岡も彼の兒のために、世間に聞えるやうにならう、後には天下の指折のものになるやうに考へられた。

自分は自分で見限つたし、其處へお前が来てくれなものだから、最う／＼望はなくなつたが、餘り生

れて来た効かない、待て／＼、あの小児のために、
後の榮を祈つてやらう。

相生寺の先のお上人は、私が小児の折には、何ん
なにか行末を頼母しがつて下すつたか、それは私が
及ばなかつた、何うぞ出世をしますやう、あの兒が
名を天下に上げて、私が望んだ志、月ヶ岡といふ村
の名の、津々浦々にまで聞えますやう、他に身替の
ない田舎、我が身にかへても念じ上げる。私はいつ
までも此處で氣樂に世を送つて、ならば其の兒に讀
書の世話でもしよう、

・ ・ ・ ・ ・ 今考へりや恥かしいが、此の御堂の觀
世音は、私が生れると襦袢の内から御恩になつた佛
だから、一心になつて、斯うやつて、お前が寐ると
は起きて出て、三晩ばかりかゝつてこしらへた、爰
にあるのが、其の、心を籠めた誓文です。」

數夫は右手に一折の、短冊形の起誓文を、もの靜
に持つて居た。

「そして人に知れないやうに、あの先刻出して來

た、額のうしろへ納めたんです。御覽、心變の何の
ツて云ふけれど、これにも私の名とならべて、お前
も連判状の一人だよ、とさら／＼と解いて両手
を添へ、片端を斜めに落して、お静の固く引緊めた
膝へかけて、仄な明を差向けると、婦人は瞳を動か
したるのみ。

清らかな頸も、耳許も、髪かみの亂みだれに曇りを帯びて、岩
井靜馬が佛は更なり、打見には三十路ばかりと、人
もいふほど世帯染みた、病後の竈やつれ今の間に、又傷
ましきまで、頬ほもこけて、風かぜが染むか、肩かたもさみし
く、力ちからなげに左手ゆんでで壓おさへた、胸むねのあたりの膨ふくらかな
るも、石女うますめのあはれが見える。

つい今しかたまで、思ふ男と、二人づれの嬉しさに、
野路の雨ものならず、氣も冴さけえ、聲こゑも高く、
珍めづしさに重おもきも忘れて、丸まるく肥こえた鰹かつを下さげて、口
三味線さんみせんでさゞめいたとは、生うまれかはつたやうである。

引添ひきそふ數夫かずをも物寂ものさびしく、丘かの薄すくももの淋さみしく、大
空そらの星ほしの光ひかりも淋さみしい、たゞ御堂みだうの縁えんの、朽くちた欄干てすり

に引かけた提灯の明が射す、むら薄の葉に包まれ、莖にかゝつて轉がつた、一尾の魚のみ、露に生きて、草の葉よりも蒼く、二人の顔の色よりも白い。

これより前、此の御堂にのぼる時、彼の材木小屋を出で、椿あり、ついて小流に沿うて行けば、觀世音おはします、其處へ行つて雨宿を、と數夫は心有つて拵へたのであるけれども、お静は唯興に乗じて、新家の近いのも小降になつたのも怪まず、まるで道行だね、意氣で可いと、一つは蟹に恐れれば、佛の御名も頼母しく、浮か／＼と坂を攀ぢて、威勢よく伏拝み、御免下さいましなど、薩陀に挨拶をする浮かれ加減。雨は其折から上つたのであつたが、大空に雲の名残の無きさへ、お静は疾より夢心地。たとへば鯉を提げて、二人づれ、同一お静と數夫とが、手を引き合つて丘の下を口三味線を通る姿を、別にあり／＼と此處から見ても、驚きも怪しみもしないであらう。

其の時數夫は身を開いて、其處ともなく星の色を仰ぎながら、

「最う此の誓文を上げてからは、日も月も年も長

くつてくれるとばかりで、他に何も思はなかつた
が、いつかお前まへと、矢張り此處こゝへあそびに來た時ときだ
つた。」

「ねえ、桔梗だの女郎花、薄だの、藤袴はいゝけれど、水引の花まで、珍しさうに抱へ切れないほど両手で抱いて、岨を下りる時につて、蛇が恐いといふから、私が先へ立つて持つて居た桑の枝を折つたのに捉まりながら、鬼薊の葉を見つけて取らうといふから、咲いて居ないのにお止しと云つたら、あの、お父さんもお優しいし、お母さんもお優しい、あなたも優しいし、私も優しい、御覽なさい、桔梗が優しいのに、女郎花が優しいでせう、薄も然うなら藤袴も優しい花、恚う又優しいものばかりぢや、何だか心細いやうな気がするから、鬼薊を交ぜませう、とお前が然う云つた時から、最う、私は少し考へついて居ただけれど、意氣地はないが、どちらとも心が決まらないで居ただから、何も今日思ひ立つた譯でもないが、先刻の蟹の時、何うしても奮發をせずにや居ないと極めた。

なるほど氣がつけば段々に張も無くなりや、意地も無くなる、何うやら聲まで低くなつて、お互に是

ぢや何の事はない、人間のおも湯のやうな、しつこ
しのないものが出来ツ了ふ。

だから静さん、よく思つて蹴巖見、何も悲しいこ
とも、情ないこともないんです、思ふやうになりさ
へすりや、またしないで置かうか。それだもの、祝
つてくれたつて可いわけた、唯頼みたいのはお二方
で、今夜彼處に在らつしやる、」と少し伸上つて
池子の方。
お静も夢見るやうな顔を上げた。

丘の下で、
「朝に咲き、夕にしをるゝ朝顔さへも、あら、ど
ツこいさのサ、どツこいさ、」
と幽に聞えて、通るものがあるので、數夫は衝と
身を以つて提灯の灯を祕した。

「數夫さん。」

「何。」

「そして何時行きます。」

「直ぐ。」

「え！」

「何も今ツからと言ふわけぢやないが、實は反故にする氣で居たけれど、慙うなれば大切な私を鼻屑にして呉れる人の手紙が來て居る、其人と一所に行つて、志を立てるには、最う然う悠々とはして居られぬ。思ひ立つたが吉日だから、明日にも出かけようよ。考へて見りや馬鹿々々しい此の誓文は何のことだ、第一佛様にだつて申請がないんです、」と、笑さへ浮べた其の顔、眠の覺たる星眼冴けく、迷の雲の晴々しさ。

數夫は今の口ぶりで、お靜が事の由を快く承認つたとばかり思つたので、其のまゝ誓文に手をかけて、一いきに裂かうとする。

お靜は胸を躍らせて、思はず身を揉んで、
「あれ、まあ、待つて下さいよ、あなた。」

と顔を膽つたが、はら／＼と落涙した。
聲を呑んで、

「私もうこんなに弱くなつてしまつたんですも

の、

「と詮方なさうに吐息を吐く。」

意氣既に動かすべからず、數夫は初めて屹となつ

て、

「ぢやあ、お前、東京へ歸かい。」

「

「さうすりや無い昔とあきらめよう。」

黙つてかぶりを振るのであつた。

「歸らない？」

「歸りません。」

「其では後生だから聞いておくれ。」

「何もあなた、そんなに立派にならなくつても可

んですのに、恚うやつてさへ居られるんなら、私は

田圃の草でも取りますよ、眞個よ。彼の白い雲が出

て、田圃道を歩いた時は、宛で冥土とやら、何で

すか、此の世ぢやないやうに思つたんですもの、そ

れでも貴下と一所だから、些とも悲しくはなかつた

んですから、一所に此處で死ねとおつしやるんなら、

譯はないのにね、」と莞爾淋しく笑つたが、數大

の、一足退つたのを見て、お靜は投げたやうに身を

起した。

「そして何處なの、東京でせう。」

「否。」

「あら、それぢや兄さんの行つて在らつしやる、

北海道。」

「最つと先。」

「大變ねえ。それぢや、西洋。」と串戯のやう

に云ふ。

しばらくして、

「むゝ。」

倒れようとした、

「お静。」と、しつかと抱き留めて、顔を並べて

肩を合せ、

「あれ、御覽、あの流れるやうな天の川の少しさ

きに、目立つて光る星が七ツ。恚うくつきりと七個

處にね、丁ど、沼田の實家と、月ヶ岡の内、それ、

二人立つて居る此の御堂と、可いかい、見えるかい、

停車場前のお茶屋の處と、蟹の居た海濱のやうな形

になつて七つあらう。彼の星は居所がかはるけれど

も、一番端の星から眞直に、二番目の星との間の五

つがけだけ、放して見ると、小さいけれども別に光
明の目立った星が見えようね、可し。外國だつて何
わけはない。私が學問に行く處は直ぐ彼の下にあた
るもの。」

七ツの星を一四ツの瞳、北斗の光を膽つて、しば
らく瞬もしなかつた。

お静はやがて目を背けると、身をずらして男の胸
へ、氷のやうな額髪、弱々と打頷く。

「守らせたまへ、觀世音。」

願をかへた誓文を、數夫は片手に押頂いた、時に
遠近の森の中、峙の鳥の氣勢して、ワツと上げたる
人の聲、觀音堂の廂にかけて、秋草しげき山の端に、
二十六夜の月出でたり。

【完】